
第 3 2 世界

閃夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第32世界

【Nコード】

N9974Y

【作者名】

閃夜

【あらすじ】

「英雄の一族の末裔であるルディアと、謎の少年ユオンは、特殊な生まれ方をしたために、大きな魔力をもっていた。大きな魔力は、時には人々を助け、時には傷つける。彼等は出会い、お互いを支えながら、その力をもってどう生きるのか。見物だとは思わないか？ウイドン」

「トラスト……お前はさっさと仕事をしろ」

「む。つれないな。まあいい。一人で楽しむとするか」

はじまり

緑茂る森の中。ひっそりと建つ屋敷があつた。

そこには、この世界の列強の国々に一目置かれている、ある一族が住んでいた。

かつて世界の危機に一人で立ち向かった英雄ルディル・ファースの末裔の一族。

その功績は、三千年たった今でも詩人達に輝かしく語られている。また、その子孫である方々も、国々の争いの仲立ちをしたり、部族間の抗争を止めたり、魔物退治をしたりと多くの功績を残し、あらゆる人々から尊敬されている。

それは、現代当主であるアルス・ファースも例外ではない。

しかしながら、ご当主アルス様はただ今現在進行形で、列強の国々の王城にも負けない立派なお屋敷の中庭の円形の噴水の周りをぐるぐるぐるぐるぐるぐる歩き回っていた。時々ふと立ち止まり、何か考えているかと思うとまた歩き回るというのを繰り返していた。

細身で長身。銀の髪に深い藍色の瞳。容姿端麗なアルスが、ため息をついて、ぼーっと屋敷を眺め、そしてまた忙しなく噴水の周りを回るのだ。

そんな様子を端から見ている使用人達は、

「アルス様、今日は落ち着きませんね」

「本当に。世の人々が、この様子を見たらどう思われるかしら」

「アルス様ほどの美しい方なら何をしても素敵に思えるわよ」
「そうでしょうね。まあ、今日ばかりは仕方ありませんね」

こんな話をしながら呆れながらも微笑ましくその様子を見守っている。

そんな中、エントランスから先日5歳になったばかりの長男。レ
ジエル・ファールラスが出てきた。

レジエルは父の様子を見ると、呆れながらも珍しい光景に少し笑
った。

「父上様。もう少し落ち着いてはどうですか？」

「ああ……レジエルか。どうだ？ ルイーゼの様子は」

「母上は変わらない様でした。が……」

レジエルは、困った様に黙り込む。

「どうした？ 気になる事があるのなら言ってみなさい」

アルスが促すと

「父上様は、精霊達が静か過ぎると思いませんか？」

レジエルは、屋敷の周りの森の方に目をむける。

「そうだな」

それはアルスも気になっていた事のように、眉を曇らせる。

「精霊達は、この日をとて楽しみにしている様だったのに、何か変です」

「……森で何かあったのかも知れない」

そう言うとアルスは掌で空に円を描く。円を中心に薄緑色の魔方阵が浮かび上がり、アルスを中心に風がゆったりとかける。

「風の精霊よ。我が呼び声に応えよ。姿を表せ」

薄緑色の光が一箇所に集まり、二人の子供の姿をした風の精霊があらわれた。

「え？」

その姿をみて、レジェルは驚いた。アルスも眉をひそめる。

「シルフに、シルフィード。貴方方のような高貴な精霊がなぜここに？ 西の神殿から出てくるのは珍しいな……」

驚くのも無理はない。アルスは、その辺りにいる風の精霊を呼ぶ術を使ったのだ。召喚術を使った訳ではない。それなのに、シルフとシルフィードが現れるということは、彼等がその辺りにいた。という事だ。

シルフが口を開く。

「英雄の末裔。アルス・ファールス」

「はい」

アルスが応え、ゆつたり礼をする。

「同じく、レジエル・ファールス」

「は…はい！」

レジエルも父のみよう見真似で、ぎこちないながら礼をする。

辺りにいた使用人達は、精霊を見る事は出来ないが、主の様子と魔方阵から何かを悟り皆頭を下げている。

シルフとシルフィードは交互に言葉を繋げていく。

「今日、この世界で、大きな力を持った命が生まれようとしている」
「しかし、それはお前の子ではない」

「大きな命は、生まれ落ちる瞬間に大きな力をこの世界に放つだろ
う」

「おそらく、大きな命が生まれ落ちる瞬間と」

「お前の子が生まれ落ちる瞬間が重なる」

「生まれたばかりの赤子は世界の影響を受けやすい」

「どんな影響を受けるかは分からない」

「例え英雄の末裔といえど、その力に耐えられれば良いが……可能
性は低い」

「運が悪ければ母親も……その時は」

シルフの言葉に、アルスは顔色を失った。

「精霊達が静かなのはそのせいだ」

「皆、お前の子を心配している」

アルスは、大きく息を吸う。

「…大きな命…とは？」

シルフとシルフイードは、お互いに顔を見合わせ、

「神になるべき者だ」

そう言った。

「神……？」

レジエルは信じられなかった。今日やっと会えると思っていた、弟か妹か分からない兄弟が死んでしまう可能性が高いというのだ。しかも、母親まで危ないと言う。

レジエルは、知らない間に涙を流していた。

「……」

「レジエル……」

アルスは、我が子を抱き寄せ大丈夫だ。と呟く。

自分もつらいだろうに。

シルフは、目を伏せる。

「我等精霊もなんとか影響を和らげられないかとここに集っている」

「スルトやウィンディーネ、他にも多くの者が来ているのを見た」

「精霊王様も心配している」

シルフとシルフィードは心配げにレジェルを覗き込む。

「精霊方の助力ありがたく思います」

アルスは心からの感謝を述べた。

「気にするな。皆好きでしている……」

シルフがふと止まった。シルフィードも息を飲む。

「…？シルフ？シルフィード？…まさか。」

アルスは二人の様子から悟り、屋敷を仰ぎ見る。

「始まった」

「アルス。行くがよい」

アルスは一礼してレジェルを抱きかかえ、屋敷に駆けつけた。風の精の手助けを得ているので、その速さは並のものではない。

アルスにしがみついて泣いているレジェルに、堪え兼ねシルフィードが姿を現す。

「レジェル、もう泣くな。お前は兄だろう?」

シルフィードの言葉に、レジェルはぐっと涙を堪える。

「うん」

気丈に振る舞って、大人びた言動の多いレジェルの、子供らしい言動にシルフィードは少し安心した。

子供はやはり子供だな。

少しすると、使用人達が慌てふためいている様子が目につくようになった。

「アルス様! ルイーゼ様が産気づかれました!」

「! そうかつ!」

アルスがそう言った瞬間、地を揺るがすような轟音と大きな揺れが屋敷を襲った。

「っ!」

立っているのもやっとな揺れの中、シルフとシルフィードが、ルイーゼの部屋に滑り込む。

アルスは、レジェルを抱えたまま動けずにした。

「父上様。地の精霊王様が!」

レジェルの視線の方を見ると、ちょうど地の精霊王がエントランス付近に降り立ったところだった。

瞬間、あれだけ揺れて軋んでいた屋敷が嘘のように静かになった。肩のレジェルを降ろす。

独断で精霊王が一人の人間のために動くなど、まずない事だ。

アルスは英雄ルデイルと先代達の偉大さを改めて感じた。よく見ると、森の先はまだ揺れの中のようにだった。

「アルス様！ お生れになりました！ 女の子です！ しかし……」

黙った使用人を見て、アルスは青ざめ、部屋に飛び込んだ。

「ルイーゼ！」

「アルス……。……つごめ……。なさ……」

ベッドの上で、ルイーゼはボロボロと泣いていた。部屋には、水の精霊王がいた。

その腕の中には……。動く事ない小さな命。

「……ダメ……。……なのですか？」

たった数十秒の間だったが、アルスはとても長く感じた。

「残念ながら、私にはどうにも」

癒しの力をもつ水の精霊王がどうにもならない。
もうどうしようもない。

「っ……そう……ですか」

アルスは俯き拳を握る。

ルイーゼは両手で顔を覆って泣いている。

レジエルも再び静かに泣き始めた。

使用人達も、精霊達も、誰もが悲しんだ。

「くる」

何の前触れもなく。レジエルがつぶやく。その場にいたものは、
皆驚いてレジエルをみた。

レジエルは部屋のバルコニーまで行ってその扉を開けた。

「レジエル？」

レジエルの不可解な行動に、誰もが戸惑った。精霊王ですら眉を
ひそめる。

「ほう。気が利くな」

頭に響く様な声が聞こえた。

天から、明らかに生まれたばかりであろう赤子を抱えた、短い緑髪青年がバルコニーに降りた。整った顔立ちに、切れ長の目が鋭さを含んでいる。

「ウイドンさま!？」

精霊達が騒ぎだし、地の精霊王と水の精霊王が膝間付く。アルスはその光景を呆然と見ていた。この世界での最高位の存在が七人の精霊王達だからだ。

この青年が…神？

アルスは思った。レジェルは不思議そうにバルコニーの青年を見ていた。

「ほら。俺はここまでだ。後はお前がどうにかしろ」

と、ウイドンが腕の中の赤子に話す。おそらく、精霊達が言っていた、大きな命だろう。

「分かって…ああつ！ だき方を変えるなマヌケ！ 僕はまだ首がすわっていないんだ!!」

またさっきの頭に響く声が聞こえた。

その何ともシュールな会話に、耳を疑ったのはきつとアルスだけ

ではないだろう。

「失礼ながら、あなた方を精霊達が言う、神と見受けるが……ここ
にどういった要件でいらっしやったのですか？」

アルスは不躰だと思いながらも聞かすにはいられなかった。淡
い期待が急かせる。

「む？ ああ。……ウイドン！」

「お前は、いつから俺より上位になった？」

「よいでないか。僕はまだ首が据わっていないんだ！！」

ネタなのか？と思ったのはきつとアルスだけではないだろう。

「はあ……。水の精霊王よ。その子を母親に抱かせろ」

「はい」

水の精霊王は、ルイーゼにやや冷たくなった小さな命を抱かせた。
ルイーゼはまた泣きそうになりながら大事そうにつけとった。

「この子を救って下さるのですか？」

アルスが尋ねると、ウイドンが頷く。
使用人達と精霊達がざわつきだす。

「本来なら難しいが、今回は奇跡的に条件がいい。本来なら千切れ
ていてもおかしくないはずの、生命系もまだわずかに残っている。
この子はとても運の良い子だ。……あるいは」

大きな命は、じっとウイドンを見つめる。

「なんだ」

ウイドンはめんどくさそうに大きな命をみた。

「む。まあ、そういう事にしておこう」

大きな命は、青く光輝いたかと思うと、ウイドンの腕の中から身
体を浮かせてできた。

「首据わってんじゃねーか。」

ウイドンが口を尖らせて呟く。大きな命は、馬耳東風と言う感じ
だ。

大きな命が、冷たくなった小さな命の額に触れた。すると、大き
な命の指先が眩しいほど輝きだして、その場の視界を覆った。

チカチカする目がなんとか辺りを見まわせる程になった時、ルイゼの腕の中から大きな産声が上がった。

その場にいた誰もが喜びあった。使用人達も、精霊王も、精霊達も。

しかし、よく見るとベッドの上では大きな命がた倒れていた。

「…!? これはっ」

「大丈夫だ。心配はいらない」

ウイドンが、大きな命を優しく抱きかかえる。

「神と言えども生まれたばかり。まあ、当然だな」

「ほんとうに、なんとお礼をいえばよいか!!」

アルスとルイゼは、ウイドンに、大きな命に、何度も何度も感謝をのべた。

「トラストの誕生と同時に失くなった命は多い。

前後一年に生まれたいくつかは絶え、今月生まれたばかり者、また、生まれる筈だったものは、ほぼ全て絶えたと言っている。精霊達になるべく新しい命の元に集うように言ったが……。」

ウイドンは、目を伏せる。

同時に、ウイドンと大きな命の周囲に、緑色に輝く光の粒が集まってきた。

「1人でも多く助かってくれると、我等の……トラストの心も軽くなる。よかった」

ウイドンはわずかに微笑んだように見えた。しかし、すぐに真剣な表情に戻る。

「このような生まれ方をした者は、必然的に何かしらの定に縛られるだろう。」

緑の光は幻想的に輝き、彼等の姿を隠していく。

「かの英雄ルディル・ファールスのように……な。」

光が一瞬大きく瞬いたかと思うと、彼等がいたはずのそこには一陣の風が吹くだけだった。

誰も動かない中、一番に声を上げたのはレジェルだった。

「父上様!!母上様!!僕の妹は、なんと言う名なのですか!?!」

はやく聞きたくて仕方がないのだろう。口調が弾んでいる。

半分夢見心地だったアルスは、はっとした。そして、同じ状態のルイーゼと顔を見合わせて微笑んだ。

「そうだな。この子の名を決めないとな。だが、今決まったよ。この子は……」

「ルディア様ー！」

あれから六年。あの日の大地震は世界を襲った大災害として歴史に刻まれた。

あの時ファールラス家も、精霊フル活用、魔力全開で救出作業にあたったが、多くの人々が亡くなった。

「ルウウディア様ー！！！」

ウイドン神の言った通り、赤子の死亡率は異常で、あの年に生まれた子は例年の半数にも満たなかった。

さらに、当日に生まれたのは妹だけ。

後で調べると妹の生まれる前約一ヶ月と、後約一ヶ月に生まれた子供は皆無だった。

「ルウウウディイイイア様ああー！！！！！」

……妹は、ルディア・ファールラスと名付けられた。かの英雄のようにあれ。という願いかららしい。

「ルウウウディイイイアアアア様ああー！！！！ ほんと出てきて！！！」

「うるさいぞ！ カルスト！！！」

黒髪碧眼の執事服に身をつつむカルストは、ファールラス家に仕える執事だ。父様と同じ年で、昔から付き人をしていたらしい。

「レジェル様！ ルディア様を見ませんでしたか！？」

「また何処かにいったのか……」

妹、ルディアはなんというか……逃亡癖があつて、隙あらば何処かにいつてしまう。うちの使用人は皆優秀なはずなのだが、彼女の方が一枚上手らしい。

「ありえせんって。今回はあのマルタを撒いて何処かにいったらいいんですが……」

マルタとは、カルストの奥さん。彼女もこの家でメイドをしている。

「カルスト！！ お嬢様は見つかりましたか！？」

噂をすればなんとやら、赤毛に真紅の瞳をしたマルタが向こうからやってきた。

「やあ、マルタ。またルディアが逃げ出したらしいね」

レジェルの言葉に、マルタは半ば遠い目をして

「レジェル様……。お恥ずかしいですね。お嬢様はすばしいのなんの」

「まあ、アルスとルイーゼの子供だからな。と言ってしまえばすべて丸く収まってしまうのが一番怖い……」

カルストも同じように遠くを見はじめた。

「お前たちにそこまで言わせるとは……さすがルディアだな」

唐突に、レジエルは手を伸ばし、二人の間の空を掴む。

「きゃっ！」

何も無いはずの所から可愛い叫びが聞こえて、カルストもマルタも驚き、おもわず後ずさる。

「見つけたよ。ルディア」

レジエルがルディアであろう塊を抱き上げると、そこにスーッと金髪をふたつに結ったルディアが現れる。

「なんでみつかるの!?!」

ルディアは金の双眸でレジエルを見る。

「ふふ。ルディアはほんとうに光魔法が上手だね」

「お兄様には敵わないわ」

金髪金眼の妹を、銀髪で紫色の瞳をした兄が抱き上げる。その姿は、絵画から抜け出してきたかのように美しい。

「こんなところに!?!」

「はあー。とりあえず見つかったよかったですわ」

カルストとマルタは、安心して気が抜けたようだ。マルタがレジエルからルディアを受け取り、抱きかかえる。

「ルディア。あまり皆を困らせてはいけないよ？」

レジエルがいつものようにいうと、ルディアは口を尖らせながらも

「はい。」

いつものように返事をした。

「さあ、ルディア様。これから貴女様の誕生日パーティーですよ」

「レジエル様も、そろそろ着替えないといけませんね」

ルディアがマルタに連れられたのを見届けて、レジエルもパーティーの準備をすべく、自室に帰るのだった。

「お兄様には、いつも見つかってしまっわ。どうやったらうまく撒けるのかしら」

ルディアは綺麗な桃色のドレスを着て鏡の前にちょこんと座っている。髪を整えている使用人達は、愛らしいルディアをさらに可愛らしくすべく、真剣にルディアの柔らかい髪を編み上げていく。

完成するとメイド達から歓声がおこり、可愛いー。欲しいー。などという声がルディアに浴びせられる。

メイドというのはこういう人種の集まりなのだろうと、ルディアは、漠然と認識していた。

「ルディア様。くれぐれもパーティー会場から抜け出さな。でしよう？ 分かってるわ。ファースタ家の者たるもの分別はわきまえます。というか、耳にタコだよ、マルタア」

そう言い放ったルディアだが、いつもそっぴいながら何処かにいってしまっのだから困ったものだ。

マルタは、ため息を吐く。

「時間ですわ。会場に移動しましょうか」

マルタに手を引かれ、ルディアはパーティー会場に向かうのだった。

「あら、まあ！ ルディアー！！　なんて可愛らしいのー！！」
「うぐっ！！」

ルディアをみた途端に、母ルイーゼはルディアに抱きついた。ルディアの金髪と瞳は母親譲りだ。

「母様…くるしっ！！」

「あら、ごめんねルディア。ああっ！　もうなんて可愛いらしいの！？　皆！　ぐっジョブよっ！！」

「お褒めに預かり光栄です」

髪を結ったメイド達が母様と次の髪型トークを始めた頃、アルスとレジェル、後からカルストがやってきた。ルイーゼとメイドにわやくちやにされているルディアを見て、苦笑しながらも愛らしい彼女に感嘆する。

「ルディアは可愛いですね。父上」

レジェルはニコニコしながらアルスに言う。

「そうだな、ルイーゼに似て……将来はさぞかし美しくなる事だろうな」

アルスは緩みきった頬を隠そうともせず、娘にでれでれの様子だ。

「あのルディア様も、いつかは何処かに嫁いじゃうんだよね……。なんか、そう考えるとさみしいなあ。」

カタッ

カルストがなんとなく言った。

「そうですね。ルディアは可愛いし、このパーティーで何処その王子が、将来お嫁さんになって下さい！ とか言ってくるかもしれないですね」

ガタッ

レジエルがさりげなく会話を続ける。

「そんな事になったらどうするー？ アルスー……ってえあれ？」

カルストがアルスの方を見ると、アルスはとても黒い顔をしておりました。

「ああ。きっと、その国は滅ぶだろうな。……謎の天災によって」

ふふふと、怪しげな笑みを浮かべるアルスから、カルストは、静かに距離をとった。

レジエルは、その様子を見て、大笑いする。

「あははっ！ 父上が言うと冗談になりませんって」

そんなこんなでパーティーが始まり、なんの事件もなく時は過ぎ、

パーティーもお開きになりました。

謎の天災が何処かの国を襲う事もなかったようです。

その後アルスの執務室では、

「ルディア様がパーティーを抜け出さなかったなんてっ！！ 奇跡ですわっ！！」

マルタがハンカチで涙を拭きながらそう喜んでいた。

「成長と言いなさいマルタ」

ルイーゼがワインを飲みながら誇らしげに言う。

「にしても、お嬢様が抜け出さなかったのって始めてじゃないか？」

カルストが注いだワインをアルスに差し出しながら、言う。

「なにしろいい傾向じゃないか」

アルスがワインを受け取りながら微笑む。

大人達の談笑が華咲いている頃、ルディアは自室の窓から空を見上げていた。ちょうど真上に満月がある。

なんだろう……嫌な予感がする。

ルディアはさっきのパーティーの途中から、なんともいえない不安に襲われていた。

声が聞こえるのだ。自分を呼んでいる声が。

ルディアは、部屋のバルコニーに出た。

「ルディア？」

隣の部屋のバルコニーにレジェルが顔をだす。

「お兄様……」

ルディアのいつもと違う様子に、レジェルはふと不安を覚えた。

「どうしたの？ ルディア。怖い夢でも見た？」

レジェルはバルコニーの柵を飛び越え、ルディアのいるバルコニーに降り立った。

ルディアはレジェルにしがみつくと、

「嫌な予感がする。怖い。でも、行かなきゃ」

小さな震える声で、そう言いきった。

瞬間レジェルの前からふっとルディアの姿が消えた。

「ルディア!!?」

辺りを見回したが、ルディアの気配は感じられない。

「シルフ!! シルフィード!!」

レジェルが呼ぶと風の精霊が現れた。彼等はあの日からずっと屋敷に留まっているのだ。

「ルディアが消えた!! 探して!!」

レジェルがそう言うと、二人は頷いて何処かにきえていった。

「父上に知らせないと!!」

レジェルはアルスの執務室に走った。

レジェルが勢いよく執務室のドアを開けると、両親に加えカルストとマルタが談笑していた。

「レジェル? どうしたんだ? こんな時間に「父上! ルディアがっ……何処かに行ってしまった!!」

レジェルが言うと、大人達は蒼白になった。

レジェルがバルコニーでの出来事を話すと、アルスは真面目顔になる。

「分かった。レジェルとルイーゼはここにいなさい。カルスト。マルタ。腕のたつものを集める。ルディアを探す」

アルスがテキパキと指示を出し、カルストとマルタがたちあがる。

「その必要はありません」

突然謎の声がしたかと思うと、執務室の中心に長い黄緑色の髪をした男がたっていた。

「風の精霊王!?!」

アルスは、一瞬驚いたが、風の精霊王が神出鬼没なのは周知の事だと納得した。

「ルディア嬢の居場所まで送りましょう…:といたいところですが、今は無理ですね。」

「どづいつ事です!?!」

ルイーゼが叫ぶように言う。

「ウイドン神に言われたでしょう? 定のーつです」

ドオオオオオオオン！！！！
轟音が鳴り響く。

「！ 何が！？」

「なんだあれ！？」

森を抜けた辺りに、夜の闇より暗い塊があるのが月明かりに照らされて見えた。

「あれは？ 貴方は何か知っているのか？ ルディアはあそこにいるのか！？」

アルスの声が荒ぶる。

「落ち着きなさい。くわしい事は当事者に聞いて下さい。ルディア嬢ならきつと大丈夫です。ご安心を」

精霊は嘘はつかない。彼がそう言うのなら大丈夫だろう。そう思いながらも不安は募る。アルスは、黒い塊に目を向ける。

「ルディア……どうか無事で」

ルイーゼが祈る声が静かな執務室に響いた。

暗い。怖い。でも、呼んでる。
私に助けを求めている。

ルディアは黒い塊のなかを進んでいた。

これは……誰かの魔力だわ。こんなに濃い。

ルディアは気持ち悪くなりながらも、先に進む。

ルディアを呼ぶ声は優しくも聞こえ、冷たいようにも聞こえるか
細い声だった。

魔力の抵抗がどんどん強くなるのをルディアは感じていた。

頭が痛い…。

カエリタイ。

そんな思いがよぎった。

「だめ！！ ダメよ！！ 私は、ルディア・ファールラス！！ 偉大な英雄ルディルの末裔なんだもの！！！」

ルディアの魔力が全身から吹き上がる。それは黒い魔力と溶け込み、調和し、辺りはどんどん真っ白になった。

いた。

ルディアの前方に、ルディアと同じ年頃の、黒い髪をした少年が浮いていた。

気を失ってる？

ルディアが近付くと、少年はゆっくり目を開けた。

「来たんだ」

そう言うと、少年はポケットからなにかのメモを取り出し、ルディアに差し出した。

「これは？」

それには、複雑な魔導陣が描かれていた。

「属性は……光。用途は？ 何をするものなの？」

「僕の魔力を制御するものだ。かけてくれていた術師が死んで、効果を失ってしまった。僕じゃ発動出来ないから、代わりに呼んだ」

「それが私……」

「君に任せて大丈夫なのかな。なんか……頼りない」

少年の言い草に、ルディアは少々カチンときた。

「私はこれでも神童と呼ばれてるんだからっ！」

カツとなって叫ぶ。

「知ってるよ、ルディア・ファールス。ファールス家の奇跡の神童。知らない人なんていないんじゃないの？」

少年はサラツと流したが、ルディアは世間で自分はそんなに有名なのかと少々面食らった。

「いいからはやくしてよ。魔力だだ流してけっこう辛いわかる？」

そうイイながらも余裕の表情を浮かべる少年に、ルディアは再びカチンときた。

だが、この魔力がヤバげな事をなんとなく感じ取っていたルディアは、メモに視線をすべらせる。複雑かつ繊細な術式だ。

大丈夫。……私ならできる！！

ルディアは立ち上がって、少年から距離を取ると、丁寧に術を構成していった。

「意外と手際がいいね？」

少年が嫌味っぽく言う。

「うるさい。集中させて」

ルディアは静かに術を構成していった。

どれ位時間がたったろう。ルディアは術を完成させた。

あとは、発動するのみ。

「いけっ！」

ルディアは力を入れて術を発動した。

幾何学な陣が回転移動を繰り返し、少年を取り巻いていく。陣の回転が速くなり、一瞬光ったかと思うと、その一部が少年に取り込まれていった。残りは光の粉となって霧散する。

「やったっ……成……功……」

細かい作業で神経を使ったルディアは、立っていられなくなりその場に倒れた。

「……っつ……あ。だるっ！」

少年は術がかかった後の倦怠感と戦っていた。

「水と……木の精霊と……風。こんなもんかな」

少年は自身に術をかけ、倦怠感を取り除く。

「ふう。一応助かったからお礼しとくよ……って、あれ？」

振り返ると、ルディアは気を失っているようだった。

暗くてよく見えないな。

少年は手元に小さなかがり火を出した。

ルディアの方を見た少年は、息を呑んだ。さっきは逆光で見えなかったルディア・ファールスを改めて見ると、絶世の美少女だった。噂には聞いていたが、実際に目にするとはやはり感嘆するものがある。陶磁器のような白い肌に美しい金の髪がかかっていた。細かい術をかける作業で、疲れたのか、やや汗ばんでいるところがなんとも色っぽい。

この瞳はどんな色だろうか。

ルディアのそばに膝をつき、そっとその顔にかかった髪をはらう。

「こ……こんなところで寝たら風邪ひくぞー」

ぺしぺしと、頬を叩きみるが、全く反応がない。

完全に気を失ってるな。魔力の消費も激しいみたいだ。

「はやく家に返してあげよう」

少年が立ち上がった瞬間、

突風が彼を襲った。

「つつー！」

見るとルディアのまわりで、風の高位精霊シルフとシルフィードが少年を睨みつけていた。

「この子は、精霊をも魅了するの……」。

そんな事を思いながら、少年は、自分を警戒している風の精霊と向き合う。

「安心してほしい。彼女には助けられたんだ。悪いようにはしないよ。できれば家に送ってあげたいんだけど……案内してくれるかい？」

少年は、己の短い黒髪を持ち上げ、ピアスを風の精霊に強調してみせる。

「その、ピアスは」

「風の精霊王様の」

風の精霊達は、攻撃を止める。あんな放浪精霊王でも威厳がある
というのだから世界というのは分からない。

少年はルディアを抱えると、シルフとシルフィードの案内でファ
ーラス家の屋敷に向かった。

どれくらいの時間がたつたろうか。ルディアが黒い塊の元に行つてから約二時間。ついさつき、黒い塊は真つ白な光に包まれて崩れて行つた。

白い光から感じるルディアの魔力に、ルイーゼは一安心した。

「終わった……のですか？」

風の精霊王に尋ねると、多分な。と曖昧な答えが帰ってきた。

「あれはいつたいたんだつたのですか？ そろそろ答えて下さつてもよろしいのでは？」

アルスがイライラしているのを隠す事なく、風の精霊王に詰め寄る。二時間の間何度もあそこに行こうとして、その度に風の精霊王に止められていたのだ。レジェルもルイーゼも、もどかしいながらも黙って見ていた。

「そうですね……彼に聞くといいでしょう」

風の精霊王がそう言って視線を移した先には、気を失つたルディアを抱きかかえた、黒髪の少年が立っていた。

「ルディア！！」

「ルディア様！！」

皆がルディアに駆け寄る。

「大丈夫。魔力の消費が激しくて気を失っただけです」

そう言って、少年はルイーゼのにルディアを渡す。

「貴女が側にいた方が彼女の回復が速そうです」

ルイーゼ腕の中のルディアの規則的な寝息を聞いて、アルスは安堵した。

「君は？」

どことなく冷たい口調で、アルスが尋ねる。

見たところルディアと年は変わらないふうな少年が、いったい何の関わりがあるのだろうか。

「僕はユオン。先程の魔力の暴走の源です。彼女には、暴走を止める手助けをしてもらいました。何の断りもなく、申し訳ありません。あまり放置しておく周囲に害を来たすので」

ユオンはそう言いながら頭を下げた。

「何？」

アルスは耳を疑った。ユオンは先程の黒い塊が、魔力の暴走だと言うのだ。魔力の暴走は、珍しい事例ではないが、あんなに巨大で、持続的なものは例がなかった。

そもそも魔力の暴走というのは、術師の感情の高まりが臨界点を

突破した時に起こる魔力の大爆発の事で、大爆発というからには一瞬の出来事なのだ。二時間も続くのはおかしい。

また、臨界点は魔力の量に比例するので、魔力の高い術師が臨界点を突破する事はまずない。あれだけ巨大な魔力を持つのであれば、臨界点などそうやすやすと越えられはしないはずだ。

なによりもこの少年には、臨界点を突破するほどの感情の高まりがあつたようには思えない。

アルスは顎に手を当てて深く考えこんでしまった。

ユオンはじつとアルスを見ていた。

これが英雄の末裔……。

大体考えているだろう事には予測がついていたが、それをどう説明したらよいものかと思ひ悩む。

それに、術で取り除いているとはいっても、あれだけの繊細で膨大な術を受けたのだ。ユオンは今すぐにでも眠ってしまいたかつた。

深く深呼吸をして、再びアルスを見る。

え？

ユオンは目を見開いた。アルスの深い藍色だった右目の瞳が紅く変色し、更には虹彩にあたる部分が十字に裂けていたのだ。

「……レジェル。どう思う？」

アルスは、視線をユオンにむけたまま唐突にレジェルに問い掛けた。話を振られたレジェルも、アルスと同じように右目が紅く変色し、やはり虹彩が十字に裂けていた。

「嘘を言っているようには思えません。それに、なにより謝罪の念と誠意がある」

「そうだな。わたしもそう見える」

ここに来て始めてアルスが、ユオンに優しい表情をみせる。それを見て、ユオンの緊張が少しほどけた。

確かに謝罪をしにきたのだが、誠意があるなどと言われたので、ユオンは少し照れ臭かった。

「とにかく、今日はもう遅い。君は疲れているようだし、話は明日聞こう」

アルスの言葉にユオンは安堵する。このままだと確実に途中でダウンしていたはずだろう。休んでいいと聞いた瞬間から、体中の力が抜けて行くのを感じる。

「部屋を取らせるから、そこで休みなさい。ご両親には何か言ってきたのかい？」

アルスの言葉に、ユオンは表情を曇らせる。

「両親は…死にました。二、三時間程前に」

ユオンは、困ったような、泣きそうな表情でそう答えた。
直後、何の前触れもなく意識を手放してしまった。

「と……おいつ！」

アルスはユオンを抱きとめる。突然過ぎたので、おおいに焦っていた。

「うわっ！ 大丈夫なんすかねこの子」

カルストが駆け寄ってきたので、託す事にする。

「だいぶ疲れていた上、緊張していたようだ」

「もともと限界だったその上に、貴方が威圧なさるから………可哀想に」

ルイーゼに言われて、アルスも少しやり過ぎたかと罪悪感を感じた。

「……両親が亡くなったって言うてましたね。これから行くところとか………あるのでしょうか？」

レジェルがユオンを見てほそりつつぶやく。

強い子供だ。両親がなくなった悲しみは、最後の一瞬までひとかけらも見せる事はなかった。

「とりあえず、明日話を聞こう。レジエルも、もう寝なさい。お前はまだ目に慣れていないから疲れるだろう?」
「はい。そうします。おやすみなさい」

そうして、ルディアの誕生日パーティーの夜は幕を閉じた。

目覚めた君は。

ルディアは、いつものように自室で目を覚ました。

「ルディア！ よかった！ 起きたのね！」

「母様」

はつきりしない頭で、何故母様がここにいるのか分からなかったが、段々と昨日の出来事を思い出していった。母様はきつと心配し
てずつついていてくれたのだろう、と理解する。

「そっだ……私。そうか」

ルディアは少年に術をかけた所まで思い出したが、そこから先、
どうやって屋敷まで辿り着いたのかはどうやっても思い出せなかつ
た。

「母様。私、どうやって帰ってきたの？」

「ユオンが連れて帰ってくれたのよ」

「ユオン？」

ユオン？誰だろう。

ルディアは聞き覚えのない名前に首を傾げる。

「ユオンを知らないの？名乗ってないのかしら……。黒髪の男の子
よ。貴女を呼んだっていう」

「ああ。ユオンって名前なのね」

ユオンとは昨日のあの術をかけた少年の名前らしい、と納得した。

……あんな術をかけた後で動けたのかしら。

ルディアは、ベッドから降りて大きな伸びをした。

「もう大丈夫なの？何をしたかは知らないけど、昨日はだいぶ魔力を消費していたのよ」

「うん。大丈夫。まだ完全に回復はしてないけど、動いても問題なさそう」

母様を安心させるために、笑ってみせる。

母様は、心配症だからね。

「あ。母様。今、ユオンは何処にいるの？」

「南棟の1番食堂よりの客間よ。さあ、その前に着替えなさい」

ルイーゼに着替えを手伝ってもらってから、ルディアは南棟に向かった。

シヨートカットルートの中庭を通っていると、見知らぬ男が立っていた。黄緑色の長い髪に、オリーブ色の瞳。普通でない独特の雰

困気のある人だ。

緑の髪に、緑色の目、それに……。あの人はまさか……。

ルディアは、昔、地の精霊王から聞いたある人の特徴を思い出した。

「貴方は……風の精霊王様？」

彼もこちらに気付いたのか、微笑みながら近寄ってくる。

「はじめまして。ルディア嬢。よく分かりましたね」

にっこりと笑って風の精霊王は、ルディアのあたまを撫でる。

「やっぱり。ベリルやリュシカと同じ感じがするもの。」

それに、風の精霊王は、全体的に緑色で常に笑ってるロリコンだ。ってベリルが言ってたわ」

かつて地の精霊王ベリルが言った言葉を思い出しながら、ルディアはふと疑問に思った。

ロリコンってなんだろうか。

「ははは。ベリルは次に会ったら微塵切りですね」

風の精霊王は、笑顔は笑顔でも、どこことなく怖い笑顔でそう言った。

「ところで、ルディア嬢。水の精霊王が名を許したのですか？」

「うん！ リュシカが名前で呼んでいいよ。っていつてくれたわ！」

風の精霊王は、目を見開く。

七人の精霊王の中でも堅物ランクが最も高いリュシカが名を許すとは……。

精霊王の、名を呼ぶことは、精霊王からの信頼の証でありとても名誉な事であると同時に、名を許される人は数少ない。

「ふふふ。そうですかあの彼女が……」

リュシカは中々人を信頼しないのでとても珍しい。

「？ 何が可笑しいの？」

キョトンとしているルディア。

「いいえ、なんでもありませんよ。……ルディア・ファールス。私の名を許しましょう。私の名は、ゼフィルスといます」

それを聞いて、ルディアは一瞬ポカンとしたが、すぐ我にかえった。

「……え。ええっ！？ いいの！？ まだ出会って五分も経ってないと思うよ！？」

「いいのです。リュシカが信頼するものなら私も信頼できます。それに、貴方はユオンの恩人ですから。」

「はあ……。そういうもののなの？」

「そういうものですよ。では、私はこれでお暇しましょう。ユオンによりしく言っというて下さい」

そう言ってゼフィルスは何処かに消えてしまった。

ほんとうに風のようにつかめない人だったな。まあいつか。頼れるお友達が増えたと思おう。

そう心の中で納得して、ルディアは南棟に入ってしまった。

ユオンのいる客間にいくと、部屋にはベッドに横たわって寝息を立てる彼以外は誰もいなかった。静かに近づいて行って彼の顔を覗き込むと、やはり昨日のあの少年で間違いなかった。整った顔に、伏せた睫毛の影が落ちている。

綺麗な子だな。

ルディアは素直にそう思った。

突然彼が呻き出した。苦しそうな表情をして、汗をながしている。悪い夢でも見ているのだろうか。

ルディアは備えつけのクローゼットからタオルを出してきて、ユオンの汗を丁寧に拭いていく。

彼の額にかかる髪をどけようと、彼の顔を覗き込む形になったとき、唐突にユオンが目を覚ました。だいぶ顔が近い位置で視線が合う。

やっぱり綺麗な子だな。

彼の真紅の瞳をみて、改めて思った。

「…え。はあっ!!!？」

驚いて声を上げたユオンに苦笑する。

「おはよう。目が覚めたみたいだね」

ルディアは笑ってそう言った。

目覚めると君が。

夢を見た。

父さんと、母さんが、僕を置いて何処かに行ってしまっ夢。

「嫌だ……。父さん！ 母さん！ 僕を置いて行かないで！！」

泣きながら追いかけても、追いつくどころか逆に遠のいていく父さんと、母さん。

「僕は……どうすればいいの？」

泣き崩れる自分をみながら、僕は、夢の世界を後にした。

ゆっくり目を開けると、何故か目の前にドアップな少女の顔があった。

「……え。はあっ！！？」

我ながら情けない声を出したと思う。

一瞬思考が停止したが、昨日の事を思い出して、ここがフェアリースタである事を思い出す。

「おはよう。目が覚めたみたいだね」

愛らしく微笑むのは、昨日僕に術をかけたルディア・ファールスだった。

昨日は見る事ができなかった、その瞳は黄金だった。

「昨日は、倒れた私を送ってくれたそうで……ありがとう」

ルディアは、はにかみながら言った。

「あ……ああ。こちらこそ術かけてくれてありがとう」

ユオンも昨日言い逃した礼を述べた。

ユオンがめざめたのは、太陽がだいぶ昇った時間だった。

「クローゼットに貴方の着替えが入ってたから、着るといいわ。私は外にいるから着替えたら呼んでちょうだい」

そう言っつてルディアは、部屋の外に行ってしまった。

そういえば、自分が身につけている服が全く身に覚えのない物だと気づいた。柔らかな生地で、とても着心地がいい。クローゼットを開けると、昨日着ていた服がはいつていた。それに着替えて、ルディアを呼ぶ。

「必要ないかもしれないけど……私は、ルディア。ルディア・ファ

「ラスよ。よろしく」

そう言って手を差し伸べられる。

本当に必要ないくらいの有名人だからな。

ユオンは差し伸べられた手を握り返し自己紹介に答える。

「僕は、ユオン」

握った彼女の手は細く白かった。

「ところで、ユオン。お腹空いてない？」

「……空いてる」

よく考えると、昨日は色々あって朝から何もたべていなかった。

「だと思った。厨房で何か貰いましょう。わたしも、何も食べてないの」

そう言って歩き出す彼女の後ろをユオンはついて行く。

「あ」

「うわっ！……急に立ち止まるな」

「そういえば、ゼフィルスがユオンよろしく言っというて。って言うて何処かに行っちゃったよ？」

「……………そうか」

あの野郎逃げやがった。

ユオンは今回の件で、彼に説明の一部を任せようとしていた。

仮にも精霊王だ。どこぞの誰とも分からぬ自分の言葉よりかは信用してくれるだろうと思っていたのだ。

ユオンは放浪精霊王ゼフィルスに次会ったら文句の一つでも言うてやろうと心に決めた。

「貴方は、ゼフィルスに名を許されてるの？」

「まあ……………不本意ながらな。ゼフィルスは、小さい頃から一緒だったし……………」

そこまで言っつて、疑問が生まれた。

「君も、ゼフィルスに名を許されたのか？」

「うん。ついさっきね」

「……………何もされてない？」

「え？何もって……………ただお話しただけよ？」

ルディアは、何でそんな事を聞くのか。というふうに首を傾げる。

彼女は分かってないようだ。奴の本性を……………。

ユオンは、風の精霊王にはじめて会った時の出来事を思い出して

思わず身震いする。

「そつ……ならいいんだ」

ユオンの言葉の意味が理解できず、ルディアは困ったようだ。頭の上に、クエッションマークが見えるような顔をしている。

その後、取り留めのない会話をしているうちに厨房に到着する。ルディアが厨房の料理人達からサンドイッチをもらい、中庭で食べよう、というので二人は中庭に出る。

厨房で貰ったサンドイッチは、ユオンが今までに見た事もないような食材が沢山入っていた。なんだろうかと疑問に思い、ルディアに聞いてみると、南の国のフルーツだとか、北の国の珍しい野菜だとかと丁寧に説明してくれた。

はじめて食べるそれ等の食材を使ったサンドイッチは、今までに食べたものの中で最高に美味しかった。

ユオン

サンドイッチを食べているユオンを見ながら、ルディアは違和感を感じる。

昨日とは、違う人みたい。

ルディアは、昨日彼と交わした会話を思いだす。昨日は、どこか棘があるが、子供らしい言い方が多かった。しかし今日は、やや大人びた言い方が多い……。

「おはようルディア。君も起きたんだね、ユオン」

そんな疑問を感じていると。後ろからレジエルが声をかけてきた。

「兄様！ おはようー！」

「おはようございます」

ユオンは敬語だ。年上は敬うのだろう。

そういえば、ユオンって何歳だろう？

ユオンに関する疑問がまた増えてしまった。どうしてこうも気になるのだろうか。

よく考えると、今まで、パーティーなどで同じくらいの年代の子には何人も会っていたが、どの子もどこかの国の王族だとか、公爵

家の跡取りだとかで、気を遣っていた。ユオンに対しては、そういう先入観が無いので、他の事に気が付く機会が多いのだろう。

私にとって気兼ねなく話せる同年代の子どもは、ユオンがはじめてだったのかもしれないな。

「ルディア、聞いているかい？」

レジエルの言葉にハツとする。

「う……ごめんなさい兄様。何か言った？」

完全に自分の世界にいたので、レジエルが何か言っていたのを聞き逃してしまったらしい。

「まだ、具合でも悪いのかい？」

レジエルは熱を測るようにルディアの額に手を当てる。

「大丈夫。ちょっと考え事してただけよ。で、さっきなんて言ったの？」

心配するレジエルに、大丈夫だよ、と笑顔を向ける。レジエルは安心したように微笑んだ。

「昨日の事を聞こうと思ってね。君とユオンを呼びに来たんだ。父様が執務室で待ってるから行くところか」

「うん！」

ルディアは、レジエルに手を引かれて歩きだす。

今思えば、ルディアは昨日の事を何も知らない。

ちらつと隣を歩くユオンを盗み見る。すると、彼もこちらを見ていたようでバツチリ目が合った。ドキツとしたが、彼が何事もなかったかのように、視線を前にむけたので、ルディアも自然に視線を前に向ける事ができた。

執務室に着くと、レジエルが執務室の扉をノックする。

「父様。二人を連れて来ました」

レジエルが言うと、中から入りなさい、と、アルスの声が出て、三人は執務室に入った。

執務室ではアルスとルイーゼ、それとカルスト、マルタが何かを話していたようだった。

「おはようルディア、ユオン。昨日はよく眠れたかい？」

「はい。昼までぐっすり寝ていたようです」

アルスの問いかけに、ユオンが苦笑気味に答える。

「ははは。そうか。それはよかった」

アルスが微笑み、執務室のソファに座るよう二人を促し、向かいの席に自分も腰掛ける。レジェルとルイーゼもアルスの隣に座り、カルストとマルタは、その後ろで立っていた。

まるで今から裁判をするみたいだな。

ユオンは、あながち間違いではないなと思いながら、小さく深呼吸した。

「さて、昨日の事について聞かせてもらおうか」

先程の微笑みは、どこにいったのか。アルスが真剣な表情で、裁判の開始を宣告した。

ユオン・バージェス

「少し長い話になると思います。説明と言っても、自分でもまだよく整理されていないので……あつた事をありのまま話そうと思います」

ユオンはそう話をきりだした。

「僕は、東の大国ドルバ王国で父さんと母さんと一緒に住んでいました。

何の変哲もない普通の家庭だったと思います。

父さんと母さんは、二人とも強い魔力を持っていてどちらも光の属性でした。僕は、そんな二人の間から闇の属性を持って生まれました。

珍しい事ですが、父さん方の祖父が闇の属性だったので、そちらが強く出たのだろうと言い聞かされてきました。

僕も、そういうことなのだ、あまり気にしてはいませんでした」

ユオンは、そこで話を一旦切ると、大きく息を吸って再び話し始める。

「ちょうど一週間ほど前の夕方です。僕は買い物を頼まれて、夕市に行きました。

何の問題もなく買い物を終わらせて、うちに帰ると、風の精霊王が来ていました。

父さんと母さんは、彼に名を許されていて、彼が来る事は珍しい

事ではありませんでした。父さんと母さんと僕と彼の四人で夕食をとりました。

夕食を食べ終わる頃、父さんが突然、僕にある話をし始めました。

六年前の大地震の時の話でした。

結論から言うと、僕は父さんと母さんの本当の子どもではありませんでした。

あの日、母さんは妊娠していて、もうすぐ子供が生まれるという時に、あの地震が起きたそうです。そのショックで、生まれたばかりの子どもは死んでしまいました。父さんと母さんは、悲しみました。

地震が収まって、一ヶ月した頃、風と炎と木の精霊王が一人の赤子を抱いて二人の元を訪れました。

その子は、異常なほど強い闇の魔力を持っていて、その力はほっておくと周囲に悪影響を及ぼすという事でした。

精霊王達は、二人に言いました。

『今は我らの力でなんとか事なきを得ているが、この子が成長していくと精霊王達だけの力では、どうする事もできなくなってしまう。仕方がなく殺そうとしたのだが、どうやっても殺す事ができなかった。』

そこで力を封印しようとしたが、精霊には光の属性を持つものがない。

く、それもできなかつた。協力してはくれないか』と。

二人は協力する事を引き受け、封印の陣を作りました。その子がとてつもない力を持つていたので、必然的に陣は細かく、膨大な物になってしまいました。陣が完全したのは、良いものの、その陣は二人の魔力を足し合わせないと発動できませんでした。

二人は力を合わせて術を発動しました。

術の発動は成功しました。

しかし、それはギリギリの魔力で組み上げた不完全な封印で、本来の封印術のように、術師の死後もその力を保つ事はできなかつたのです。

しかも、発動の際に魔力を絞り出した影響で二人の肉体はボロボロでした。

もって十年。それが限界だろう。二人は、そう推測しました。

二人は精霊王達に自分達が死ぬまでの間は、この子を育てさせて欲しいと願い出しました。

精霊王達は二人に、その子を預けました。

その子どもが、僕だったそうです。

父さんと母さんが、術をかけてから約六年。二人は自分達の肉体にガタが出始めた事に気付いていました。

そうになると、いつ、僕にかけられている術が効力を失い、この魔力が世界に悪影響を及ぼし始めるか……。

二人は、何らかの対策をしておく事にしました。強い光の術師に、術の引き継ぎを依頼しようとしたのです。

そこで思いついたのが、ファールラス家でした。

どのみちファールラス家なら、いつかこの魔力をどうにかしないといけない機会がやってきてもおかしくないだろう。

二人は、僕を連れてファールラス家を訪れる為に、家を出ました。早めに話しを取り決めておこうとしたのです。

でも、二人がここを訪れる事は叶いませんでした。

来る途中、突然二人は倒れてしまいました。そして、静かに死ん

できました。

二人は死に際に、僕に陣のメモを託しました。

両親の死と、封印が解かれた事もかさなって僕は、魔力を暴走させた。

それが昨日起きた事に関する全てです」

話し終わると、アルスとレジエルはやはりあの紅い十字の瞳でこちらを見ていた。

長い沈黙が続いた。

「……話は分かった」

アルスのまっすぐな視線を正面からうけとめる。

「……ありがとうございます」

良かった、途中から自分でもきちんと話せているか分からなかったが、なんとか伝わったらしい。と、ホッと一息つく。

「……ユオン。その『封印の陣』というのを見せてくれないか？」
「あ、はい」

昨日、ここに来る際に回収した例のメモは空間魔法で異空間にしまっていた。

取り出してアルスに手渡す。アルスが受け取ったメモを、他の四人も覗き込む。

メモを見た途端、全員が目を見張って驚愕した。

「うわあっ……。コレがお嬢様をぶっ倒した封印陣ですか……」

「なんと言うか……エグいですわ」

「おかしいわ。目が疲れてるのかしら。インクの黒い部分が、白紙の部分よりも多く見えるわ……」

「これ考えるのに、何日費やしたんでしょうね」

各々が、感想を述べる。

「ルディア。お前……コレを一人で組み上げて発動したのかい？」

尋ねるアルスの肩は震えている。笑いを堪えているようだ。

「そうよ。組み上げるだけで、ものすっごくいい時間がかかったんだから」

「ぶはっ！！ あははははははは！！」

とうとう噴き出したアルスに、ルディアはキョトンとしている。ユオンも大爆笑する彼を前に、目を丸くする。

まあ、六歳の幼気な少女が、こんなアホみたいな難易度の術を一人で組み上げて発動しました。しかも、それが貴方の娘です。なんて言われたら、笑いたくもなるのかもしれない。

「貴方。気持ち悪いですよ」

ルイーゼが若干引き気味に言う。

「あははは……ふふっ。いや、失礼。さすがはルディアだな、と思っ
つてな。ははは」

アルスは一頻り笑うと、ユオンに立って後ろを向くように言った。

「何をするんですか？」

「術の完成度と、発動具合を見ようと思ってね」

そう言って彼は、顎に手を当ててジッとユオンの背後を眺める。

何があり、何を見られているのかサッパリ分からないユオンは、黙って言う事を聞く事にした。

後ろを向くと、必然的に隣に座っていたルディアと向かい合う形になる。彼女は、ジツとこちらを見ていた。その瞳には、どこか悲し気な色が見えた気がしたが、彼女はすぐに俯いてしまったのではつきりとは分からなかった。

「恐ろしいほど問題がないな。コレだけの術なら、多少のズレがあってもおかしくないのに……。きちんと発動もされているようだ」

もういいよ。と肩を叩かれたので、再びソファに腰を下ろす。

「術の複雑さ、細かさ、膨大さを除けば世間一般の封印の陣と変わりはない。封印は完璧に成功している。」

ルディアへの影響もないようで、安心したよ」

ふうー。と息を吐いて、アルスはソファにもたれかかる。

「ところで、ユオン。君はご両親を亡くしたそうだが……どこかく宛があるのかい？」

ユオンは、ハツとした。

「……考えてませんでした」

何もかもが唐突過ぎて、そんな事まで気が回っていなかった。父さんや母さんは何か言ってたか？いや、二人ともあと四年は大丈夫だと思っていいたらしいから、そこらへんは後回しにしていたのだから。

考え込むユオンをみて、アルスはカルストに目配せする。カルストが軽く頷く。

「ユオン。もしもいく宛がないのなら、ここにいるカルストとマルタの養子にならないかい？」

「……はい？」

耳を疑った。今、彼はなんと言ったか？

「……養子？」

「ああ。実はゼフィルスから、君が天涯孤独になったから、なんとかして欲しいと言われてね。どうしようか考えていたら、彼等が養子にしたいと言っただ」

「……」

ユオンは、空いた口が塞がらない。

ユオンがそうなるのも無理はない。

マルタと言う人は知らないが、カルストは……カルスト・バージエスは、故郷ドルバ王国では超有名人物だ。

ドルバ王国三大貴族筆頭の一族バージェス家の長男で、多才な才能に恵まれながら、『当主とかめんどくさい。』『自分にはむいてない。』と、次男に当主の座を譲り、ファールス家に仕える事にしてしまった、という伝説の持ち主だ。

この話はドルバ王国内では、大地震の中奇跡の生誕を迎えたルデア・ファールスと同じくらい有名な話だろう。

「あははー。驚くのも、無理ないよなー。ドルバ出身らしいし？」

カルストは、軽い口調でへらへらと言う。

「俺達には、色々あって子供ができないんだ。いつか、養子をとろうと話はしていたんだが、なかなか機会に恵まれなくてなー」

「そこに貴方がきて、天涯孤独だと聞いたもので……。ちよつど髪と眼が私達と同じ色ですし、良ければ、私たちの養子になって下さいませんか？」

ユオンは、カルストとマルタを交互にみて、どうしたものかと、アルスに視線をむける。

「君さえよければ、了承してあげて欲しい。ルディアも年の近い友達が出るのは、嬉しいだろうし。」

それに、何よりも君はルディアの傍にいた方がいいようだ。万が一という場合があるからね」

確かに。ファース家としてもこの魔力はほってはおけないだろう。

「…分かりました。その件受けさせていただきます」

ユオンは、少し照れくさそうに答えた。

「おっ！ 決まりだな！」

「ええ。よろしくお願いしますね！ ユオン！」

暖かな笑顔を向けられ、ふと死んだ両親を思い出す。

この人達は、自分のせいで不幸にはしたくない。

沸き起こる悲しみを抑えてユオンは、笑う。

「はい。よろしくお願いします」

こうして、彼はユオン・バージェスとなった。

光と闇

ユオンが、カルストとマルタの養子になった。

という事は、コレからずっと一緒にいられる。

ルディアは嬉しかった。

レジエルは、十歳になった去年から学園の寮に入っていて、今ここにいるのは、ルディアの誕生日パーティーがあつたからに過ぎない。

彼女はこの広い屋敷でメイド達と談笑はすれども、同年代の子と遊ぶ機会など全くなかつた。

ユオンが来てくれて、嬉しい。嬉しいけど、どうしてか素直に喜べないのは、きつと……。

ルディアは、複雑な心境でユオンをみる。

その日の夜。

ユオンはアルスから部屋をもらい、そこで生活する事となった。

広い部屋で、バルコニー付きだ。なんとなくバルコニーに出る。

ほんの少しだけ欠けている満月が、東の空に見える。

ドルバの方向だ。

夜風が彼の頬を静かに撫でる。

「眠れないの？」

突然、隣のバルコニーから声がかかった。そこには、ネグリジェ姿のルディアが立っていた。

どういうわけか、隣はルディアの部屋なのだ。そのまた向こうに、レジェルの部屋がつづく。

「別に。ちょっと夜風に当たりたかっただけ」

「ふふ。敬語外れたね」

そう言いながら、彼女はバルコニーの柵を越えてこちらに来る。

「慣れないんだよ……」

ファールラス家という事で、かなり気をつけて敬語を使っていたが、

同年の彼女の前でまで敬語を使う気にはなれなかった。

「ねえ。ユオンってほんとに六歳なの？」

「？　そうだけど？　なんで？」

「いや、なんか大人びてるなあーって。兄様みたい。」

「そうか？」

まあ、そうかもしれない。魔力の強い者は、脳の発達が著しいと聞いた事がある。その影響だろう。

その条件は、ルディアにも当てはまるのだろうか、彼女は全く大人びていない。

さつき、夕食を一緒にとった時も、サラダの中の人参の存在に嘆いていた。子どもらしい反応だと言えるだろう。

夕食の事を思い出して、苦笑する。

「あ。今、私の事を子どもだって思ったでしょ」

ルディアが頬を膨らませて、ユオンを睨む。

「すごい。よくわかったな」

悪びれる事もなく言い切る。

ルディアは、拗ねてそっぽをむいてしまった。

そういう所が子どもなんだよ。

と、言おうとしたが、やめた。

沈黙が訪れた。

機嫌を損ねてしまったか？と、ユオンは少々焦った。

「ねえ。」

何か言うつべきか考えていると、不意にルディアの方から声がかかった。

「なに？」

ルディアの方を見ると、彼女の背後には月が重なっており、黄金の髪を夜風になびかせるその姿を浮彫りにしていた。

「ユオンはさ……」
「両親が死んだ時、泣いてないでしょ」

ユオンは、一瞬金縛りにあつたかのように動きが止まった。

「……なんで？」

「私には、ユオンが無理してるようにしか見えないの」

逆光で、陰っている彼女の顔の中、何処か悲しみを湛えた黄金の瞳だけが異様な輝きをもっていた。

スーッと、背筋に冷たい物が走った。体が小刻みに、震える。

「そんなことないよ」

ダメだ。耐えないと。

「嘘ね。ダメだよ。泣かなきゃ」

「どうして君にそんな事言われなきゃならない？」

触れてほしくないところにズカズカと入ってくる彼女に、ユオン

は得体のしれない怒りを覚えた。

「言ったでしょ。」

ユオンは無理してるようにしか見えない。
無理やり自分の感情を押さえ込んで悲しい事を考えないようにして
る。

しかも、無駄に感情を隠すのがうまいんだもの。
見えて痛々しいわ」

ユオンは、大きなため息をはく。

「ダメだよ……。君も見ただろ？ あの黒い空間を。あれは、僕が
悲しんだせいで発生したんだ。あれは、世界に害をなす。僕は、悲
しんじゃいけないんだ」

父さんと母さんが死んだとき、僕はひどく取り乱した。そのせいで、あの黒い空間ができあがった。

「私が止めたからもう大丈夫よ」

「分からないよ？　こんな気持ち悪い力なんだ。もしかしたら今度は、術を引きちぎるかも」

自嘲的な、きつい口調になった。

「それなら、また私が術をかけなおしてあげるわ。

だから……ね？

泣いてもいいよ」

そう言って、ルディアは俯くユオンの頬にそっと手を添えた。

「父さんも、母さんも、僕のせいで死んだんだ」

沈黙のあと、ユオンがポツリと言う。

同時に、彼の魔力が怪しくうねるのをルディアは感じとった。

「そうかもしれないわね」

ルディアは、あっさり肯定する。

「僕には、悲しむ権利なんてない。父さんと母さんを殺したのは、僕だ。」

……なのに」

ユオンは、涙を溜めた真紅の瞳でまっすぐルディアを見る。悲痛な表情に、彼女は胸を痛める。

震える声でユオンは続ける。

「父さんと、母さんは、死に際に僕にむかって言ったんだ。『愛してる』って」

「うん」

「おかしいよね。」

僕がいなければ父さんも母さんも死なずにすんだのに。もっと生きていたら、本当の二人の子供が生まれて、もっと幸せになれたかもしれないのに。

全部、全部、僕がうばったのに!!」

堰を切ったようにユオンの頬を涙が伝っていく。

添えられたルディアの手も、その涙で濡れていく。

だけど、彼女は決して手を離そうとはしない。

「僕がなんか、いなければよかったのに!!」

あの大地震に巻き込まれて死んでしまえばよかったんだ!!」

ユオンが叫ぶ。息が荒く、とても興奮しているようだ。

ルディアは、そっとユオンを抱きしめる。身長は十センチほどユ

オンの方が高いので、彼女は少し背伸びをする形になった。

ユオンは一瞬戸惑ったようだったが、ルディアの肩口に顔を埋め

泣いた。

ルディアは無言で、彼の悲しみで暴走する魔力に自分の魔力をぶつけて相殺していく。

東にあった月はいつの間にか、昨日の夜のように真上にきていた。

ユオンは大分落ち着いたようで、魔力も安定しだしてきた。

「ユオンは、自分を責めてばかりだね」

ポンポンと彼の背中を叩く。

「今度は、違う事考えようよ?」

ルディアは微笑み、ゆっくり話し出す。

「ユオンのお父さんもお母さんが、最後の最後、貴方に伝えた言葉は、『愛してる』でした。

貴方はご両親に愛されていた。

貴方が、自分なんていなければよかったなんて言って、彼等は喜ぶ?

貴方を憎む事もできたのに、彼等はそうはしなかった。

貴方は、彼等の分まで生きなきゃいけない。

いなければよかったなんて、言っちゃいけない」

まるで小さい子どもに言い聞かせるような、そんな口調でルディアは続ける。

「わたしはね、ユオンがきてくれてとつても嬉しいのよ？」

お兄様は、明後日には寮に帰ってしまうから……さみしくなるなと思つてたけど、同い年の遊び相手ができたから。

カルストとマルタは、ずうっと子どもがほしいっていつてたの。

だけど、父様の権力の暴力により、お暇をもらう事ができず、なかなか養子選びができないでいたの。

二人ともユオンがきてくれてとても喜んでたわ。

ゼフィルスだって、ユオンを心配して父様に貴方を預けたんだよ？

あと、私が名を許された理由の半分は貴方の恩人だからということだったわ。

あなたを心配してくれる人、あなたがいてくれて嬉しい人がこんなにいるのに、

いなければよかった。

なんて、言わないで？」

ね？と笑う彼女は、子どもっぽさなんて微塵も感じられなかった。

ユオンが、その言葉、その笑顔でどれだけ救われたか……。

ユオンは、また泣いた。しかし、今度は悲しかったからでは、ない。

情けない姿をしているだろう。

これからも、こんな事があるかもしれない。

その度に、きっと彼女は慰めてくれるのだろう。

笑ってくれるのだろう。

「……ありがとう」

いつか、自分も彼女の力になればと、そう願った。

光と闇（後書き）

王道展開すみません…。

レジエル

ユオンとルディアが、バルコニーで寝付いてしまった頃、彼等に人影がかかる。

そこには、例の紅い十字の右目をしたレジエルが立っていた。シルフとシルフィードも一緒だ。

「こんなところで寝たら風邪をひいてしまっただろっ」

彼はそういうと、シルフとシルフィードに言って二人を各々のベッドに寝かせる。

「彼奴は悲しむ事を封じていたのだな」

シルフがユオンの部屋の方を見る。

「幼いのに、強がった子だ。昔の誰かさんを見ているようだよ。…いや……今もか」

シルフィードが、ニヤニヤしながらレジエルを見る。

「一体誰の事を言っているんだい？ シルフフィード」

レジェルは何処吹く風といった感じだ。そんな様子の彼を見て、シルフィードは頬を膨らます。

「まったく、子どもらしくない。魔力の強い者は、皆そうだ。可愛くない！」

何の反応も示さないレジェルに、シルフィードはつまらなくなつたのか、からかつのをやめた。

「ルディア嬢は、優しい子だな」

今度はルディアの部屋の方を見るシルフ。

「強大な魔力保持者にしては、思考、行動が幼いと思っていたが…全くそんな事はなかったな」

「ユオンも、彼の魔力も、ルディア嬢さえいれば安心だな」

シルフとシルフィードは、お互いに頷き、微笑む。

「そうかな？」

僕は逆に心配になったよ」

レジェルが、暗い表情をみせる。

月にサアーと雲がかかってゆき、辺りはより一層暗くなった。

シルフとシルフィードは、顔を見合わせる。
レジェルの、その瞳にはいったい何が映ったのだろうか。

「さあっ。もう僕も寝ようか。おやすみ、二人とも」

レジェルは何事もなかったかのように微笑み、自室に帰った。

「……やはり、可愛くないな」

シルフィードの眩きは、夜の闇に消えて行った。

閑話 尊敬できる人。(前書き)

今回は、閑話です。

「ユオン・バージェス」の少し前におきた出来事の話。

この後、「ユオン」の後半と、「ユオン・バージェス」の話に続きます。

閑話 尊敬できる人。

アルスは執務室で様々な書類に目を通しながらペンを滑らせていた。

今年はやけに仕事が多い気がするな。

そんな事を思いながら作業に集中する。

ファース家の仕事というのは、だいたい国や部族の交渉の仲立ちだ。

ファース家は、どこの国にも属しない中立的立場と、先代からの威光、当主に受け継がれる特殊な能力を盾に仲介者という役割になっている。

他にも様々な事業を展開している。主な収入源としては、各国で「GAZ^{ギヤズ}」と呼ばれる、社会組織を経営している。

「アルス。入ってるぞー」

「!?!」

突然声がかかり、おもわずビクツとする。目の前には、黒髪碧眼の男。カルストだ。

断じて気づけなかった訳ではない。……作業に集中していたのだ。

「カルスト…入って来る前に断りをいれろ。というか、ノックぐらいしろ」

「まあ、細かい事は、いいじゃない。というか、今更すぎるんじゃないね？ それ。」

G A Zからの報告がとどいたぞ。ユオンについてのバサリと机に置かれた資料には、ユオンについての情報がぎっしり書き込まれていた。

「ふむ。いつもながら、仕事が早くて助かるな」

書類を手に取り、ザツと目を通す。

「ユオン・アレイド」

生年月日は、四五六七年 三月七日。
年齢は六歳。

ユアン・アレイドと、リオン・アレイドの養子……。

ユアン・アレイドとリオン・アレイドは、二人とも孤児か」

「四五六七年……大震災の年……ね」

カルストがポツリと呟く。

四五六七年 四月十五日が、あの震災の日。ルディアの生まれの日だ。

謎の覚えやすさを持った年である。

「ゼフィルスの話によると、彼はあの震災の日に生まれた子だとか……」

「は？」

カルストは、目を見開く。

まあ、当然の反応だろう。

ちなみに自分は、それを聞いた時、飲んでいた紅茶を盛大に吹いた。

「でも、ここには……三月七日って」

「両親が変に思われぬように、気をきかしたのだろうな」

「なるほど」

あの時、ルディアの評価は二分した。

彼女が生まれたせいであの大震災が起きたのだと言い出す輩が現れたのだ。

世間一般論として、光の魔法は神聖なるもの、とされているのでその説は瞬く間に消えていったが、一部の宗教団体や、地下組織は、未だ彼女を亡き者にしようと動いている。

公にはなっていないが、これまでにルディアは数回命を狙われた事もあった。

だから、彼女を箱入りにして育てている。

「ルディアお嬢様だけじゃなかったんっすねー」

「ああ……。しかも、ルディアは一旦は死にかけたが、彼は普通に生まれたそうだ」

カルスト目が再び見開かれる。

ここは、驚愕ポイントその二だ。

ちなみに自分は、それを聞いた時、食べていた焼き菓子を喉に詰まらせた。

「……ルディルの真の再来って事か……」

そう。

かの英雄が生まれた日も、大震災が起きて多くの命が亡くなった。この事もルディアの悪い噂を取り除く種となった。

「ふむ。……決めた。やはり、ファールラス家の養子にしよう」

「え！？ ユオンをつ！？」

「ああ。ゼフィルスに頼まれたからな」

「っえー！！！ ちよつと待てよ！！ 待て待て待ってよ！！ 狙ってたのに！！！！」

「狙ってた？ ユオンを？」

「そうさ！ マルタと話して、もしユオンに行く所がないなら、養子にしようって話をしてたんだっ！！」

そうか……そういえば、彼等は、養子を欲しがっていた。

マルタは、大震災の日に妊娠中だった子供を流してしまい、その影響で二度と子を産めなくなったのだ。二人は子供好きなので、いつか養子をとろう。そう決めていた。

確かに、よく似た容姿だったし……それもいいかもしれない。

そこまで考えた途端、とある考えがアルスの脳裏をよぎった。

「……ハッ！ ダ……ダメだ！！」

「え！？ なんでさっ？」

カルストは、アルスが了承する事を確信していたようだった。

「ダメなものはダメだ！！ ユオンは、ファールラス家の養子にする
！……！」

「はあああああ！！??？」

二人がぎゃあぎゃあと言い合っている中。執務室の外では……

「あれ？ どうしたんだ？ マルタ」

執務室の外でティーセットを持ったマルタがオロオロしながら立っていた。

「レジエル様。……いえ、アルス様にお茶を差し入れようとやって来たのですが……どうやら中でうちの人と言い争っているようで……」

「……またか」

レジエルは、呆れたふうに言って、執務室の扉を開く。

「父様。入ります」

「失礼いたします」

中ではやはり、アルスとカルストが言い合っていた。

「いいや！！ ユオンはファース家の養子にする！！！！ 絶対だ

！！！！」

「だから！ 俺とマルタの養子になった方が、共通点があるから彼も気が楽だろ！！？」

なるほど。言い争いの原因は、ユオンらしい。

「マルタ。ユオンを養子にするんですか？」

「ええ。例の通り私達には子供ができませんので……。彼なら、カ
ルストと同じ髪、私と同じ瞳と共通点もありますし、そうなればい
いなとは思っていたのですが……。アルス様は、反対の御様子です
ね……」

悲しげに目を細めるマルタ。

「父様のあれはどうせくだらない理由ですよ。ちょっと母様を呼ん
できて下さい」

「？ はい」

マルタがルイーゼを呼びに、執務室を後にする。ドアが開閉した
事に二人は気づいていない様子だ。

しばらくすると、ルイーゼがマルタと一緒に執務室に入ってきた。
「また、あの二人は……。で、今度の原因はなんですか？」

「どちらがユオンを養子にするか、という話みたいですね」

「……。なるほどそういう事ですか」

納得したように頷き、ルイーゼはツカツカとまだ騒いでいるアルスのもとに歩み寄る。

そして……

スパーーーン！！！！

「平手……」

呆然とマルタが呟く。

カルストは、ピッタリ二歩後退した。

レジエルは、面白い物をみたという顔だ。

「あ・な・た。そこに正座」

ルイーゼは、人差し指を頬に当て、可愛らしい仕草でトス黒いオリラを放つ。

「……………はい」

こうなってしまうば、いくらアルスであろうとルイーゼに逆らう事はできない。

「まったく。あなたという人は。」

どうせ『ルディアが、ユオンのところに嫁いでいったらどうしよう』とかゆう、心底くだらない理由なんでしょうね!?!」

「うっ……」

図星のようだ。

アルスはルイーゼから目を反らす。

「心せまっ!?!?!?!」

カルストがツツコミをいれる。

「ほんとに心底どうでもいい……」

マルタの無表情と棒読みが、何気に怖い。

「ああ。そうさ!?! 可愛い娘を嫁がせたくない親がいて何が悪い!?!」

アルスは綺麗に開きなおった!!

カルストとマルタが白い目でアルスを見ている……。

レジエルは、隅の方で笑いを耐えている!

「馬鹿ですか、あなたは!! ルディアにだっていつかは好きな人の一人や二人できます!!」

ルイーゼはブチ切れた!

「いつまでもそんな事を言っていたら、いつかルディアに『お父様ウザい』と言われるようになりますよ!!」

「ハッ!!」

アルスは、大人になったルディアが、自分に向かって……

『お父様……ウザい』

と、言っている様子を想像した!!

「!!!!」

アルスは大ダメージを受けた!! もう……（精神的に）立って
いられない。

ルイーゼは勝利した!

カルストとマルタは、かなり引いている!!

レジエルは、吹き出した!!

「親バカも度を過ぎると恐ろしいものね……」

ふっと、髪をかき上げながらルイーゼが言う。

「さすがルイーゼ！！ かつこいー！！」

「一生ついて行きますわ！！ ルイーゼ様！！」

カルストとマルタから、賞賛と拍手が飛ぶ。

「という事で、あなた。ユオンは、カルストとマルタの養子にする。
……という事でよろしいですね？」

「……………だがっ！」

「は？」

アルスは、最後の力を振り絞って反抗しようとした！

しかし！ ルイーゼの威圧を前に黙り込んでしまった……。

「……………くっ！ 分かったよ！！ 認めればいいんだろー！！」

アルスが吐き捨てるように言った。

ルイーゼが満足気に頷く。

「「おおお！！！」」

カルストとマルタが喜びあう。ユオンが、了承するかどうかという問題は考えないにないようだ。

「あははは！！」

とりあえず、ユオンとルディアが起きたみたいなので、呼んできます。

それまでに、いつも通りになっていて下さいよ？ 父様」

レジエルが、二人を呼びに執務室をあとにする。

しばらくして、二人を連れてレジエルは再び執務室にはいった。

「おはようルディア、ユオン。昨日はよく眠れたかい？」

そう言ったアルスには威厳があり、その姿からは先程あんなふざ

けた出来事があったとはかけらも思えない。

ルイーゼ、カルスト、マルタもいつもと変わらない。

さすがだな。父様達は。

だから尊敬できるんだ。

レジエルは、先程の事を思い出して再び吹き出しそうになったが、
なんとかこらえた。

マルタ母さん

「……ん」

朝日の眩しさにユオンはゆっくり目を覚ます。小さな鳥がバルコニーでちょこちょこしているのがカーテン越しに見えた。

昨日はバルコニーで眠ってしまった気がしたが、起きてみると与えられた自分の部屋のベットの上だった。

誰が運んてくれたんだろう？

体を起こし、顔を洗おうと部屋についているバスルームに向かう。鏡をみるとまだ目が腫れていた。

泣いたってまるわかりじゃないか。

涙の跡を消すように、いつもより念入りに顔を洗う。

両親が死んでも、自分の出生や魔力の事を聞いた後だったから、泣きたくても泣けなくて

涙を無理に我慢しても、やっぱり魔力の暴走は止められなくて

死のうとしても、死ねなくて

ほんとに、『自分』という化け物が怖くなって……。

彼女はわかってくれていて、僕に一番必要な言葉をくれた。

柄にもなく大泣きしてしまっただが、昨日おもしろい泣けたおかげか今日はスッキリとした気分で、心が軽く感じた。

昨日は夜遅くまでルディアに付き合ってもらってしまった。彼女はぐっすり眠れただろうか？

そんな事を考えながらタオルで顔をふいて、バスルームから出るとりあえず着替えをすませようとクローゼットを開ける。

「……………うわっ」

クローゼットの中には、とても高級感あふれる上品そうな服がズラリと並んでいた。主に白や薄い青を基調としたものが多い。

アルスに、「部屋にある物は好きに使ってくれていい」と言われていたが、コレを着るのはどうかと思い、自分がここに来るときに着ていた服を探したがどこにもみつからなかった。

「あ。そういえば、今着てるんだった……」

見つからないのもそのはずである。昨日は知らずのうちに眠ってしまったので、服を変える時間などなかった。

まあ今日はこのままでいいか。

にしても困った。さすがに服一着で生活していくのは、衛生上に問題が生じる……。

かといってこんな高級そうな服を身につけるのは気が引けた。

「しかも白……」

ユオンは、髪や瞳の色に合わせて黒や赤を基調とした服を好んで着ていた。それが自分に一番良く似合う色だとも理解しているつもりだ。

白色や青色が嫌い……というわけではないが、汚してしまいそうで怖かった。この服達はきつと値が張るのだろうし。

クローゼットの前で悶々としていると、誰かが扉をノックした。

「ユオン？ 起きていますか？ 開けますよ？」

扉を開けて入ってきたのはマルタだった。今日は、肩で切り揃えられた真っ赤な赤毛を後ろでちいさく結っている。

マルタは、ユオンが寝ているかと思っていたのか、クローゼットの前で立っている彼を見て少し驚いたようだったが、すぐに微笑んだ。

「おはよう、ユオン。起きていたのね」

「おはようございちゃっ……おはようございます」

バージエス家の養子となり、新しい母となったマルタを前に、緊張して嚙んでしまった。

恥ずかしい……

「ふふふっ。緊張しなくてもいいのよ？ 私は、貴方の母親になったの。敬語も必要ありませんし、お母さんって呼んでくれてもかまいませんわ」

真っ赤になるユオンをよそに、マルタは楽しげに話す。

「ところで、何をしていましたの？」

「え……と。」

ユオンは、チラリとクローゼットの方に視線を向ける。マルタは首をかしげ、ユオンの視線を追う。

「あー……。なるほど」

クローゼットの中を見て、マルタは納得したようだった。

「……ごめんなさい。アルス様は、好きに使えと言ってくれたんですが……」

マルタは一着の服を手取る。

「これは、レジェル様の昔の服……。ユオンとはイメージが違うかしら……？」

マルタは、ユオンに服を合わせ、じっとみる。

「サイズは大丈夫そうですね。形も問題はないでしょう」

そう言うとマルタはいくつかの服を見繕い、次々とユオンに合わせていった。

「ふんふんふん」

鼻歌を歌いはじめたマルタは、やけに楽しそうだ。

「ユオンは、黒とか赤とか似合いそうですね。紫もステキかしら？ ああっ！ 金もステキかしら！！？」

マルタのテンションがうなぎ登りしている。できれば金メインの服は遠慮したい……。

…。そういえば、母さんも服を選ぶ時こうやって一人騒いでたっけ…。女の人はみんなこういう服選びとか好きなんだろうな。

そんな事を考えながら、しばらくなされるがまま身を任せていたら、マルタがクローゼットの服を全部自身の空間にしまいこんだ。

「えっ！ もしかして捨てちゃうんですか!？」

いくらなんでもそれはもったいなすぎる。慌てて止めようとする
と、違うという答えが返ってきた。

「サイズは合ってるから、染めて、少々アレンジしようと思います
わ」

「え！？ いいんですか！！？」

「大丈夫。レジエル様も、もう着れないでしょうし。問題ありませ
んわ」

「いやいや、問題はそこではなくて……。
ユオンは、金銭感覚の格差を思い知った。

「そんな……だつてすごい高そうなのに……」

「あら？ そんな事を気にしていましたの？ 大丈夫ですわ。この
服、私が作りましたの」

「え？」

「こんな見事な服を作る人がどうしてメイドなんかやってるんだろ
う……？この服を売るだけで、十分に稼いで生活できそうなのに。」

それだけマルタの作品はすごかった。

「ふふ。力作でしょう？」

「ユオンにも服を作ってあげようと思っているのですが……そんな
にすぐにはできませんので」

マルタは、少し残念そうに微笑む。

「しばらくは、レジエル様のおさがりをアレンジしたもので我慢してくださいか？」

それで、ユオンのために作った服が完成したら、母親からのほじめの贈り物、という事で受け取って下さいね」

そう言って、マルタはユオンの頭を優しく撫でる。その手を通して温かい感情が伝わってきた。じわっと込み上げる物があつたが、それは形をなす前になんとか止めた。

「……はい。……ありがとうございます。母さん」

照れながら、でもはつきりとその言葉を口にする。

やっぱり少しむず痒かった。

マルタは……母さんは驚いた顔をしたが、すぐに嬉しそうに頬を緩め、僕を抱き寄せた。

『あなたを心配してくれる人、あなたがいてくれて嬉しい人がこんなにいるのに、

いなければよかった。

なんて、言わないで?』

昨日の夜、ルディアが僕にくれた言葉を思い出し、そっと目を
むる。

言わないよ。

そんな事は、もう

言わない。

カルスト

ユオンの部屋を出たマルタは、染料と、大きな桶を持って裏庭に出る。

自身の空間から先ほどの約四十着程の衣服を取り出し、風魔法で宙に浮かせる。

ブワーーーー

シャツや上着、ズボンなど種類は様々だ。
それらを、じーっと眺めるマルタ。

「よし！！ イメージは大体固まりましたわ！」

そう言って、宙に舞う衣服から数十着を選び出し、残りは再び空間にしまう。
そして地面に座り、ボタンやビーズなどの染めない部分を取り除く作業にとりかかる。

「ふんふんふふふん」

鼻歌を歌いながら作業に熱中する。

ふと手を止めて、思い出すのは先ほどの可愛い息子。ユオン

顔を真っ赤にして……わ……わたくしの事を……お……お母さん……
……って！……！ 可愛い……！ 可愛すぎですわ……！……！

「うふ……うふふふ……ふふ」

怪しげな声が裏庭から響く。

たまたま近くを通りかかったカルストは、その声を聞いて足を止める。

……裏庭に……誰がいる？

そろそろと建物の陰から裏庭をのぞくと、そこには楽しそうな表情で何かしている妻がいた。

なんだ、マルタか。

ほっとして、ゆっくり彼女に近づいていく。

「何やってんだ？」

「きゃっ……！」

マルタは驚き、すばい動きで距離をとる。

一瞬殺気だったが、カルストを見て、ふー……と長い息を吐く。

「……カルスト……。もうっ！　びっくりさせないで下さい！！」

「気配を消したつもりはないんだけどな」

ポリポリと頬を搔くカルスト。

いつも皆に、気配がない、驚かせるな、と言われるが、まったくそんな事をしている自覚はない。

……仕事の癖が身にしみついてんだよなあ……。

「気配を絶って近づくなと、いつも言っていますのに！　いつか、うっかり攻撃してしまっても知りませんわよ！」

マルタの長々とした説教が始まってしまった。

にしても、頬を膨らませる彼女はとても可愛いと思う。

「怒ったマルタもかわいいよ」

彼女の頬に手を添え、甘く囁く。

「いつもなら、長々しく説教しますが、今日の私はとてももなく機嫌が良いので、許して差し上げますわ！！」

それよりも！！さっき嬉しい事がありましたのよ！！！！」

「スル……」

カルストの甘い言葉にときめかない女性はいない。と言われている

た時代が確かに存在した。

この鈍感娘と結婚を取り付けるまでには、彼の計り知れない、かつ涙ぐましい努力があった……というのは有名な話だ。

「カルスト？　ねえカルスト、聞いていますか？」

「聞いているさー！」

ちなみに半泣きである。

「で？　何があつたんだ？」

マルタは、うふふと先ほどの怪しい声を発し、両手を頬にあてる。

この表情……どこか、すごい身近で見たことがあるような……？

カルストはそう感じたが、どこで見たかは思い出せなかった。

「実はですね……先ほど、ユオンに『お母さん』って呼ばれてしまいましたわキャー……！！！！」

奇声を発するマルタ。

ああ……そうか、どっかで見たことあると思ったら、親バカトクするアルスと同じ表情だ。

「とうか、えっ!!?!? 　いつの間に打ち解けたんだ!!?!?
俺をさしおいて!!」

「……マルタ」

ふにっ、彼女の頬を両手で挟む。

「ぶぐっ！　にゃにしゅましゅによ、きゅりゅしゅと」

「俺に仕事を押し付けて……どこいったんだと思っていたら……なに抜け駆けしてんだ!!」

びよ〜んと今度は横に引っ張る。

「ふにいつ!!」

ペシペシとマルタが腕を叩くのでしかたなく手をはなす。
開放された彼女はばつが悪そうに視線をさ迷わせた。

「えっと……その……ごめんなさいカルスト。私、どうしても我慢できなくて……」

マルタは、縮こまって見上げてくる。

「……いいよ。もっ……」

上目遣いにやられました。

「で、これは何やってるんだ？ レジエル様の昔の服？」

「ああ。ユオンの部屋のクローゼットにしまわれていたものですね。サイズは合っていたので、彼にあった色に染めようと思いますの」

なるほど。確かに、染料や桶などそれらしいものが置かれている。

「……ということは……まさかユオンに『着せ替え』……か？」

「そういうことになるのかしら？」

輝く笑顔のマルタ。

可愛い。

可愛い……のだが、これから『着せ替え』が行われるという恐怖にカルストの顔がひきつる。

来てすぐにアレはきついだらう……。何とかして止めないと！

「マルタ……」

「バァァン!!」

「『着せ替え』と聞いて!!!」

突然屋敷の窓が勢いよく開き、そこから聞こえてきた大声に、カルストの言葉は掻き消された。

声が出た方を見ると、ルイーゼが仁王立ちしていた。後方では、メイドーズが控えている。彼女達も皆、輝かんばかりの笑顔である。

「うわああああ!! めんどくさいタイミングで、一番めんどくさい人達がでてきた!!!」

「めんどくさいとは何ですか! マルタに振り回されているような哀れな生物は去りなさい!!!」

酷い言われようである。

ちなみに、アルス、カルスト、ルイーゼの三人は学園の同期で昔から仲がよく、公の場ではカルストがけじめをつけるが、普段はお互い上下関係なく振舞っている。

「つか、いつからそこにいた!?!」

「マルタがここに来る前から、かしら?」

「つまり……最初からだな……」

「ええ。最初っからす・べ・て拝聴していますよ?」

ふうふうと不気味な笑みを浮かべるルイーゼ。
さっと手を振り、後ろのメイドーズに何かの合図をする。

……いやな予感しかない。

メイドーズの一人が録音機を持ち出し、再生ボタンを押す。
そこから流れてきたのは……

『怒ったマルタもかわいいよ』

「!?!?!?」

なんでそこ録ってたんだ!?

忘れたかったのに!?!!

『怒ったマルタもかわいいよ』

『怒ったマルタもかわいいよ』

『怒ったマルタもかわいいよ』

メイドーズの一人は、何度も巻き戻し再生を繰り返す。

『怒ったマルタもかわいいよ』

『怒ったマルタもかわいいよ』

「っ！　も…………もうやめてくれえええええええ！……！」

羞恥のあまり、耳をふさいでしゃがみ込む。

「ふっ！　ちよろいわ……！」

ルイーゼは髪をかきあげる。これは、彼女の癖だ。

「で！　マルタ…… ユオンの『着せ替え』ですって……！？
私達もませなさい……！」

「主任だけ、『着せ替え』なんてするんです……！」

「ユオンってあの可愛い子よね！？　レジエル様と違った雰囲気

で新鮮！！」

マルタはルイーゼとメイドーズに取り囲まれ、どんどん話が弾んでいっている。

ユオンをターゲットに『着せ替え』をする、というのは決定事項のようだ。

「……………はあ……………」

どさくさに紛れて例の録音機を回収したカルストは、ワイキャイ騒ぐ彼女達を置いて裏庭を後にした。

『MEDY』

裏庭を後にしたカルストは、真つ先にアルスのいるであろう執務室に向かう。

執務室の中では、アルスが至極真面目に仕事をしていた。アルスに書類を渡したり、資料を整理したりするために、数人の使用人達もいる。

アルスは、親バカという一面を除けば完璧なんだがなあ……。その一面故に、アルスの人物像が大きく残念な方に傾いている気がする……。

「どうした？カルスト」

そう言うアルスは、視線はこちらに向けず、手もとめない。腰まである長い銀髪を後ろで結び、真剣な表情で書類と睨み合う。正直かつこいいと思う。

熱心に仕事している最中に悪いが……水を差さしてもら……。

「……落ち着いて聞けよ？」

ルーゼとMEDYの奴らが『着せ替え』を実行しようとしている「

……カラン…
…バサツ…
…バサササツ…

アルスの手からペンがこぼれ落ち、
使用人の一人が持っていた書類を落とし、
また違う使用人が、整理された書類の山を崩した。

静止。

沈黙。

執務室が一気に冷えきった。

「……………ユオンか……………」

「『』名答」

さすが、アルス。
話のはやくて助かる。

「^{ステイ}MEDY」

ファールラス家で働くメイド達は、一人の例外なくこのMEDYといわれる組織に所属している。

もちろん、マルタも。ちなみに、彼女は主任といって、メイド達の中では一番偉い地位についている。

MEDYとは…ファールラス家が経営する、各国王家御用達の超有名ブランドだ。

一応、長い歴史のある組織で、その成り立ちはこうだ。

……かつて、ファールラス家に、もっと自由に主人を飾り付けたい衝動にかられたメイド達がいた。

耐えきれず自分達の作った服を主に見せると、主はたいそうその服を気に入り、それ以後メイド達の作る服しか着なくなった。

いつしかメイド達の作る服は有名になり設立されたのが、

「MEDY」

その名の由来はメイドとレディを掛け合わせただけらしい。

MEDYは世界中に支店を持ち、多くの人、主に女性が働いている。その中でも、戦闘能力に秀でた一部の人間がファールラス家のメイドとして雇われるのだ。

つまり……ファールス家にいるメイド達は……めっちゃくちゃ強い。

同じように、執事や男の使用人達も、ファールス家が運営する様々な組織から抜粋されてきた強者ではあるが……。

女という生き物は恐しい。

それだけを言っておこう。きっと全て理解してくれただろう。

そして……『着せ替え』とは……。

端から見ると、ただコーディネートしているだけにしか見えないが、その実態は、MEDYが目の保養をしたいがためだけに対象を縛り付ける拷問。

悪夢の時間。

前提、

対象者は、見目麗しい人物。

ファールラス家の一族は当然、一族外でも綺麗な容姿をしていればターゲットにされる。カルストが良い例。

一、

捕まれば延々と服を着替えさせられる。

二、

着替え終わる毎に、どうでもいい髪型の話や、装飾の話を始め、なかなか終わらない。

三、

徐々に服が改良されたりしていつて、一着の服が完璧に完成するまで次には進めない。
全く関係ない話題に移る事もしばしば……。

四、

やめたい、なんて言い出せば、白い目で見られる。しかも、何か言いましたか？　ってな感じで聞いてもくれない。

五、

逃げ出しても捕まる。

六、

ストックの服全てについて、髪型や装飾が決まると、やっと解放される。

七、

もちろん、一日では終わらない。

今までの最高記録で、二十四日。
最低でも三日は終わらない。

つまり、それだけの期間メイド達が『着せ替え』に集中して、ろくに仕事をしないのだ。

元々MEDYからの引き抜きなので、そちらが本業だ。と言つのが彼女達の意見らしい。

『着せ替え』対象外の者でも大きな疲労を被る、悪魔の祭典……。

ファールラス家の人間は、『着せ替え』をトラウマに持つものが多い。だったら、MEDYからの引き抜きなんて辞めちまえ!!

と、思うが既に伝統となつているし、主要な収入源でもあるので解散させる事もできない。

MEDYと『着せ替え』は、歴代当主の悩みの種なのだ。今代にいたっては、当主の妻であるルイーゼも『着せ替え』を開催する側なので、盛り上がり方が異常だ……。

「俺としては、いずれMEDYの餌食となるにしても、今は流石に早すぎるんじゃないか？　　っていう意見よ。」

ユオンは、この屋敷にきてまだ三日目だ。
不慣れな環境で、精神的にキツイ事はさせたくない。

「それは、私も思うが……」

アルスが何かを言いかけると、タイミング悪く誰かが執務室をノックした。

入れ。と言われて入ってきたのは……料理人の一人だった。

「……アルス様。屋敷のMEDY全てが魔窟に籠もったようです……」

「早いな……」

魔窟……ファールス家の隅にある、MEDYの仕事場の事だ。畏怖の念を込めて、男性陣はそう呼んでいる。

そこに近づいたが最後……。

……何があるかは想像にお任せする……。

……俺の口からはとても言えない……。

ちなみに、料理人は厨房から魔窟を見る事ができるので、MEDYに怪しい動きがみられたら報告しにくる事になっている。

料理人が、執務室を訪れるという事は恐怖の始まりを意味するのだ。

「今回は、どれだけ仕事しないつもりだ？ 奴ら……」

「この間は、ルディア様をターゲットに十三日、その前レジェル様で八日……」

使用人達がざわざわと、予想を立てている。

その中で一人、冷静にペンを拾い上げるアルス。

「今回に限っては大丈夫だろう」

アルスが、何の迷いもなくそう言い切った。

「「え？」」

皆キョトンとした顔でアルスを見る。

もちろん自分も。

アルスは再び書類と睨み合いはじめる。

「アルス？ 何を根拠にそんなことを？」

うんうん。と周囲の使用人達も頷く。

「おそらく、ルディアが許さんだろうからな」

「「「「……なるほど」「」「」」

アルスの言葉に納得し、その場にいた者はそれぞれの仕事に戻る。

この屋敷で、隠れたルディア嬢を見つけられるのは、アルスとレジエル
の二人だけなのである。

見つからないように...

むー。

何かが変……。

目を覚ましたルディアは、しばらくボーっとベッドの上で座っていた。

普段なら活気があるはずの時間帯なのに、屋敷中が静けさに包まれている。

静か……メイド達が動いてない……？

「……まさか…『着せ替え』？」

だとしたら、ターゲットはユオン以外考えられない。
彼はメイド達が我を失いそうな絶品素材だ。

「むうー！ ダメ！！ ユオンは私と遊ぶのっ！！」

バツとベッドから飛び降り、サツと服を着替える。

美しいフワフワとした金髪は、高い位置で結ぶ。

自身の空間にトランプやすごろくなどの遊び道具を放り投げ、ものの5分で仕度を終えると、ユオンの部屋に向かう。

Bannon!!

おもいつきり隣の部屋の扉を開けると、ユオンは驚いて振り向いた。
「びっくりした……どうしたんだ？」

ルディアは、つかつかとユオンに近いて行って、ガシィッ！ と彼の腕を掴む。

「ねえ、ユオン。魔力の遮断って、できる？」

「？ 闇魔法だから得意といったら得意だけど？」

「よかった。私、闇魔法苦手なの。今すぐかけてくれない？」

「???? いいけど……。」

そう言っつて、ユオンはルディアの額に手をかざす。

ピキィ

「おおー」

はじめて完璧な魔力の遮断を経験したルディアは、少し感動した。光属性の彼女にとって、相反する闇属性の魔法である『魔力遮断』は少し難しいのだ……。

「ユオンも、自分の魔力を遮断して」

「え？ なんでさ？」

「い・い・か・ら!!」

ルディアの剣幕に負けて、渋々自身に『魔力遮断』をかけるユオン。

「かけたけど……?」

「……すごい。こんなに近くにいるのにユオンの魔力がわかんない
ずっとユオンに、顔を近づける。

「まあ……遮断してるからな」

ユオンは視線を外し、ルディアと距離をとるかのように後ろに下がった。

私、何かしたかしら?

ユオンの行動を不思議に思ったが、今はそれどころじゃない事を思
い出す。

「これなら逃げ切れそうね」

「逃げる?」

「そうよ」

まったくわけが分からないユオンをよそに、今度はルディアが術を
かけはじめ。

パシユツ！

「何したんだ？」

「光魔法で姿を消したの。」

あと、風魔法で『音声遮断』もしたわ。

これで、外から私達の姿は見えないし、話し声も聞かれない。私達は見るとも聞く事もできるけど」

「なんでそんな事を？」

「何も知らない方がいいわ」

ルディアは、真剣な表情でそう言った。

しかし、すぐに破顔する。

「お腹空かない？　とりあえず厨房にいきましょう」

厨房までの道のりで、二、三人の人に出会ったが、まったく気付かれていないようだ。

「『魔力遮断』までしてるから完璧ね。」

父様と、兄様には見つかったらどうだろうけど……あの二人なら見つかったら平気か……」

「なあ？　なんでこんな面倒くさいことするんだ？」

「一応ユオンのためなんだよね……」

「??？」

厨房に着いた二人は、扉を開け中に入る。
端から見たら勝手に開閉する扉しか見えない。

案の定、料理人達がいぶかしげにこちらを見ている。

ピリツとした空気がながれたが、ルディアが光と風魔法を解除して
姿をあらわした事で皆ホツとした様子だ。

「ルディアお嬢様でしたか。いやはや……まったくわかりませんでしたよ」

厨房では一番年配である料理長がにこやかに声をかけてくる。

「ふふふ。凄いでしょ？」

ユオンが協力してくれてるの」

「なるほど、君が例の……」

ざわざわと、料理人達が騒ぐ。

ユオンは自分に向けられる哀れみの視線に困惑している様子だ。

「ルディアお嬢様……もう分かかってらっしゃると思います……MEDYが、魔窟に籠もっています……」

料理長は後半涙声だった。

「やっぱり。」

……私はこのままユオンといえるから、もしお父様が心配していたらその旨を伝えてちょうだい。

母様とか、MEDYには絶対言っちゃダメよ？」

「かしこまりました。」

料理長が真剣な表情で頷く。

「あと、おなか空いちゃった。何か軽く食べれる物欲しいなっ」

明るイルディアの笑顔に、厨房の緊張が解けたようだった。

「?」

まったく理解不能な会話に、ユオンはただただ頭を悩ませるばかりであった。

具象化

ルディアは魔法を掛け直し、厨房をでると、どんどん森の中に入っていく。

森まできたらさすがに見つからないでしょ。

ルディアにとって、この森は庭のようなものだった。いつも一人で歩く森の道だが、今日は隣にユオンがいる。

えへへと、思わず笑みがこぼれた。

しばらくすると、少し開けた場所に出る。ここはルディアのお気に入りの場所の一つ。木漏れ日が辺りを照らし、とても幻想的だ。

二人は地面にしゃがみ込み、厨房でもらったピザを食べた。

途中、しきりに何が起きているのかユオンに聞いたが、すべて聞き流した。

露骨に流した。

そんなルディアの態度に、ユオンも聞き出すのを諦めたようだった。

「ユオンは、トランプとかすごろくとか好き？」

「普通かな」

「そっか」

ルディアは、空間からトランプを取りだし、繰り始める。

「何する〜？」

「何でもいいけど……二人でトランプ？」

「少ないねえ。あ！ シルフとシルフィードでも呼ぼうか」

彼等なら召喚術を使えば、すぐ呼び出す事ができる。

「精霊をトランプの人数合わせに遣うなよ……」

「でも二人とも、すごい強いよ！ 大富豪とか神経衰弱とか！」

「僕は呼んでくれないのかい？」

ぬッ、とユオンの背後からレジェルが顔を出す。

「！？」

「兄様！！」

全く気が付かなかったあ……。

ユオンも気づけなかったようで、呆然としていた。

「ふふ。一応年上だからね」

レジエルはしてやったりといわんばかりの笑顔だった。

「君達も上手く気配を消したね。探すのに手間どったよ」

『手間どったよ』と言うレジエルだが、魔力を遮断して姿もみえず、声も聞こえないルディア達を見つける事など不可能に近い。

レジエルは、ルディアの隣に腰をおろす。

「兄様！ MEDYは？」

「……まだ魔窟だよ。」

料理長が君達が隠れたって父様に報告したらしくてね。

結果、こうして僕がお守りに遣わされたんだ」

お守りに、と、子供扱いされているのは気に食わないけど、明日寮に帰ってしまう兄様と過ごせるのはとても嬉しい。

ぎゅーっと抱きつくと、頭を撫でられた。

「……そのMEDYとか、魔窟とかって何ですか？ルディアが教えてくれなくて……」

ユオンは真実を知る事を諦めていなかったらしい。

「知らない方が幸せなのに……」

ルディアは、哀れみの目をユオンにむける。

「ああ……」。

でもまあ、これからここに住むんだったら知っておいた方がいいと思う。

MEDYは、ファールラス家が生み出した負の遺産というかなんというか……」

レジェルは、どこか遠くを見ているように見えた。

「『着せ替え』さえなければね……」

ルディアも一応女の子なので、可愛い洋服で着飾ってもらえるのは嬉しいし、正直楽しい。

が、何事にも限度というものがあると思う。

この間は13日間もMEDYに軟禁されていた……。

レジェルが、ユオンにMEDYについて説明しだす。
はじめは、うんうんと聞いていたユオンだったが、内容が進み『着せ替え』の話が出た後あたりから、だんだん顔がひきつっていった。

「ルディア……なんか、ありがとう……」

「いえいえ、どういたしまして」

レジェルが、体験談を交えてリアルな説明をしたので、ありありとその恐怖が伝わったらしい。

突如、ガサリと近くの茂みが揺れる。

まさか見つかった！？

逃げる準備をしたルディアだったが、大丈夫とレジェルに止められた。

改めて茂みの方を見ると、お揃いの黄緑色のポンチョを身に付けた見知らぬ少年と少女が顔を覗かせた。

歳はルディア以上、レジェル以下といったところか……。

「おー。いたいた！」

少女が服についた葉っぱを払いながら近づいてくる。黄緑色の長い髪を、後ろで太い三つ編みにしている。活発そうな、やはり黄緑色の瞳が印象的だ。

「近くまで来たら、気配で気付かれるぞ？」

少年も辺りを見回しながら近づいてくる。少女と同じような容姿をしていて、短い黄緑色の髪をツンツンと立てらせている。少女とは対比的に、落ち着いた雰囲気だ。

「それはいけないね」

レリエルが、立ちあがって光魔法を強くする。

風魔法は、あの二人が引き継いでくれたようだ。

「この感じ……まさか……シルフにシルフィード!？」

シルフとシルフィードは二人で一人前の双子精霊なので、術を使うときに顕著な癖が現れる。

「具象化できたんだ！」

精霊は肉体を持たない。

魔力が強い者だけが精霊の姿をみたり、声を聞いたりできる。

普通の人とコミュニケーションするため、精霊達は仮の肉体を作り出し、具象化する事が可能だ。しかし、それには多くの力が必要で高位の精霊しか具象化する事ができない。

精霊王などは具象化している事が多い。

「ルディア嬢よ……。我等は一応高位精霊なのだが……」

シルフが心外だと言わんばかりに眉を寄せる。

「でも、この屋敷に留まりはじめて今まで一度も具象化してなかったではないか。

まあ、する必要がなかったというだけだが……」

シルフィードが、どうだ？とスカートをつまみ、クルリと回る。

「シルフィードは本当に女精霊だったんだね」

レジェルが、意味深に頷いて感心する。

「どづという意味だ……」

シルフィードが顔を真つ赤にして兄様につかみかかろうとし、
シルフに羽交い締めにされた。

ユオンのお願い

それから5人でトランプをしたりすごろくをしたりと、とても楽しかった。

「ん?」

ババ抜きをしている最中に、ふとシルフが手を止める。

「シルフ? どうした?」

兄様が尋ねると、シルフは目をつむり耳を澄ます。

あ……。シルフがババ持ってる……。

見えてしまった。

次、私がシルフのカード引く番なのに……。

困って視線をさ迷わすが、どうしてもチラチラと見てしまう……。

見なかった事にしよう! と決め、視線を戻すと、目の前

にいるシルフィードが悪い笑みを浮かべて何かを訴えてくる……。

「あはは……」

もう、笑うしかない。

「MEDYが魔窟から出たらしいぞ？」

「『風の噂』か」

風の精霊は、風が運んで来る微かな音『風の噂』を聴き取る事ができる。

「じゃあ、もうしばらくここにいようか」

どうせ見つける事なんてできないだろう。ココにいれば安全だ。

「いや……もう、帰ろう？」

ユオンが伸びをしながら帰ろうと言い出した。

はい？

みんな目を丸くしてユオンを見る。

「ユオン？ 気でも狂ったか？」

レジェルが、心配そうにユオンの顔を覗き込む。

「そうよ！ 捕まったら終わりよ！？」

ユオンの前に、身をのりだして必死に訴える。

「大丈夫だよ。あ、でも、ルディアとレジェルには、ちょっとお願いがあるかも……」

言いにくい事なのか、こちらの様子をつかがい、反応を待つユオン。

何を言われるのかと、レジェルと顔を見合わせる。

「お願い？ 何を？」

恐る恐る聞いてみると、

「しばらく、僕に近づかないで」

と言われた。

そのままユオンは立ち上がり、すたすたと屋敷に帰りはじめてしまう。

さっき視線を反らされた事を思い出したルディアは、本格的に自分は嫌われてしまったのか？と悲しくなった。

ユオンの為を思って勝手に逃げたが、彼にとってはどうでもよかったのかもしれない。

いや、違う。ただ、自分が遊びたいがために、彼をつれまわしたのだ。

私……勝手だったのかな？

ギュツとレジエルの服の裾をつまむ。

レジエルはルディアの様子を見て、ふふつ。と笑った。

「大丈夫だよ。ルディア。彼は、君を嫌ってなんかいないよ。

むしろ……いや、いいや」

レジエルは何か言おうとして、やめた。そんな言い方をされると、続きが気になってしまっではないか。

でも、兄様がそう言うなら、きっとそうなんだろうな。

ルディアは、レジエルの言葉をとても信頼していた。一応、根拠もある。

「とにかく、ユオンには何か考えがあるみたいだよ？」

いこう？と、レジエルに手を引かれて、ルディアもユオンの後を追って屋敷に引き返すのだった。

閑話 シルフは優しいお兄さん

ユオンが帰ってしまったため、当然途中だったババ抜きは中断された。

「ちえつ。終わるのか。せつかくシルフを負かすいいチャンスだったのに！」

シルフィードは、ブツブツと文句を言っていた。

「ごめんね、シルフィード。また今度ババ抜きやろうね！」

ルディアは、ババ抜きが自然と終了した事で内心ホッとしていた。

「ああ！ 次こそは、シルフを負かしてやる！！」
意気込んで拳を突き上げるシルフィード。

「あんな事言ってるけど、シルフィードには、シルフを負かすなんて永遠にできないと思うな」
レジェルが、一人盛り上がるシルフィードに、哀れみの視線を投げかける。

「シルフィードは、ポーカーフェイスがまったくできないからな。素直でいい事だと思うぞ。おかげで、ババの位置がよく分かる」

シルフも、うんうんと頷く。

「でも、たまに負けてあげていたじゃないか。さすがお兄さんだね」

「それでもしないと、機嫌を損ねるからな。面倒くさい」

ふいっとそっぽを向くシルフ。

シルフとシルフィードの間でケンカが起こらないのは、影でシルフが妥協しているからなのだった。

『MEDY』との攻防

「アルス！」

執務室に、ルイーゼがMEDYを引き連れて入ってきた。

とうとう来たか。

アルスは、大きなため息をつく。普段なら大人しく、慎ましやかなはずのルイーゼは、『着せ替え』となると人が変わるのだ。

それはもう、誰だよと言いたくなるレベルに、だ。

「お願い、今、忙しいんだ」

何かを言われる前にねじ伏せてやろうぜ大作戦（カルスト命名）を施行する。どうせ言われる事などたかがしれている。

「ちよっ、今、ものすごく忙しいんだ」

『ものすごく』の部分をもものすごく強調して言ってやった。

「話を「後」にしてくれ……とも言いたくないかな」

ニコツと爽やかに笑う。

『着せ替え』を企んでいるときには、二度と来ないでほしいかもしれない。

「話を聞けー!!」

ルイーゼが、アルスの耳元叫んだ。

キーンと耳が鳴る。

本当に、頭が痛い……。神様、私の大人しいルイーゼを返して下さい。

切実な祈りは通じただろうか……。

そんな事を思いながらアルスは、面倒くさ気な目でルイーゼを見る。

「嫌だよ。どうせ、ユオン探せ。とか言われるんだろ?」

「そうよっ!!」

認めるのか。潔いのはいい事だ。

「諦める。」

どうしても見つけたいなら、自分で探しなさい」

「魔力すら感じないのよ?」

自分達で探そうと努力はしたらしい。

ルディア達は今、森にいるようだ。レジエルを向かわせたし、大丈

夫だろう。

「ユオンは闇属性だからな。魔力遮断など、お手の物だろう。」

亡くなった御両親の教え方が良かったのか、卓越した技術を持っている子だ。

アルスはユオンがはじめてこの屋敷に来た夜、彼が複雑な術を使って体の疲労を取り除いていた事に気がついていていた。

きっとレジェルやルディアにも劣らないだろう。

「抜かったわ。ねえ、アル「嫌だ」

何かを言われる前に……長ったらしいので割愛！

「ま・だ・何も言っていないじゃない!!」

バンバンと机を叩くルイーゼ。

インクが倒れないか心配だ。

「言わなくてもわかるさ。」

い・や・だ！

皆も、早急に持ち場に帰りなさい」

「「「えーっ！」「」」

メイド達から大ブーイングがとぶ。
まったく。ルイーゼが甘やかすから。

「えーっ。じゃないっ。」

慣れない環境で、彼がトラウマになったらどうする！」

ちなみに、自分は取り返しのつかないトラウマを植え付けられている。

「じゃあ！ 慣れるまで待てばいいんですね！」

「そういう事じゃ……はあ」

ああ言えば、こう言う。もう対応するのも面倒くさくなってきた。

後ろのほうで、カルストが、負けるな、アルス！ と呟いている。

お前も人ごとじゃないんだぞ！

キッと睨みつけてやった。

「何やってるんですか？」

突然、聞こえるはずのない声が聞こえた。

「「!?!?」「」

執務室の入り口を見ると、ユオンが怪訝な顔をして立っていた。

「ユオン!? 何で出てきた!?!」

レジェルは、MEDYの事を話さなかったのか!?

「飛んで火にいる夏のユオンとはよく言ったものだわ!？」

ルイーゼの目が輝く。

そんな言葉は聞いた事がない! だいたい今は春だ!

「ユオンく？ 例の服を染めたから合わせてみたいんですの〜」

マルタが、にこやかに歩み寄る。しかし、誰がどう見ても明らかに不審な笑みだ。

「わあっ！ 本当ですか？」

ユオンは臆する事なく無邪気に笑っている。

この状況を前に、いったいどういう神経をしているんだ！？

アルスは背筋が凍った。

「ちょっとサイズを見て見たいから、着てみてくれない！？」

ルイーゼが蘭々とした表情で、ユオンに詰め寄る。

「いいですよ？」

そう言って服を受け取ったユオンは、着替えるために執務室の外に出た。

「『えっ！？』」

後からやってきたレジエルとルディアもすれ違いで部屋を出ていった彼に唾然としていた。

どういう事だ？

レジエルに視線で詰め寄る。

レジエルは、さあ？ と肩をすくめて、困ったようにユオンがむかった方向に視線をむけた。

本性発揮

しばらくして、着替えを済ましたユオンがふたたび執務室に入ってくる。

「「「「きゃー！」「」」」」

とMEDYから黄色い声援が飛んでくる。

おい待て、此处を会場にするな……。

しかし、始まってしまったものはもう遅い。諦めて、件のユオンをみる。

レジェルの服を、彼に合うように黒色に染め、襟の端に赤いラインをつけてアクセントにしている。

なかなか似合うじゃないか。

ほう。とアルスも感心する。

メイド達がキャーキャー言っている。なかでもマルタは格別に騒がしい。

「きゃー！……！」

可愛いですわ！

可愛いですわ！……！

可愛いすぎですわぁー！……！」

「マルタ……落ち着け」

カルストが、やわめに制止にはいる。

「まったく落ち着きのない」

アルスも苦笑する。

「ユオン、かつこいい」

ルディアが、ぽそりとつぶやく。

バツと彼女を見ると、ほんのり頬が染まって……い……る？

「ルディアアアアアア!!??」

「おまえも落ち着け!!」

カルストに、おもいつきり背中を蹴られた。

マルタとの扱いの差が酷い気がする。

「よく似合うわ!!　　ユオン!!」

ルイーゼのテンションが大幅に上がっている。楽しそうだなによりだ!

ちなみに自分は、既にやけくそである。

「それでえ〜！　こんな服も作ってみたのですけど〜！　サイズが合いますかしら〜？」

目が怖いぞマルタ。

自分なら、絶対に怖気付くだろうと思うような場面でも、ユオンはしゃんとしている。

「合いますよ。

それも、レジエル様が着ていたのでしょうか？
同じ人が着ていた服なら、それも合います」

彼は、はっきりとした口調で曖昧な表現を使わなかった。

正論故に、一瞬静止するMEDY。

「で……でもでもっ、ユオンに似合っているか、ちゃんと見ないとわかりませんわっ？」

マルタの言葉に、そうそう！とMEDYが頷き合う。

「だって、皆さんが僕に似合うように一生懸命アレンジしてくれたんでしょう？　ずうっと仕事場に籠って作業してくれていたって聞きました。

だったら似合うに決まってるじゃないですか」

顔の前で手を合わせ、にっこりと天使のような微笑みを浮かべるユオン。

ははははは。

素晴らしい発想の転換だ。

いったいどうやったら、そこまでポジティブかつ現実からかけ離れた解釈ができるのか……是非とも伝授願いたいものだ。

「でもでも、コレを着たユオンが見てみたいんです〜！　愛でたいんです〜！　目の保養にしたいんです〜！」

マルタからとうとう本音が漏れた。

ユオンは少し困ったように眉を寄せると、ふうーと息を吐き、再びあの天使のような笑顔を浮かべる。

!!!???

おいおいおいおい!!!

アルスは、ユオンの変化を見逃さなかった。
隣にいるカルストも口を開けて驚いている。

レジエルとルディアが、数歩後ずさった……。彼等も気がついたよ
うだ。

ユオンは、……彼は、……闇魔法、『魅了』^{みりょう}を発動している!!

天使の微笑みを浮かべながら、悪魔の魅了を放つ！漆黒の衣服を身
に纏う、その姿はまさに小悪魔!!
黒い!! なんて黒いんだ!!!
彼の本性を垣間見た気がした……。

完全な詠唱破棄なので、テンションが上がりきっている女共は全く
気がついていない様子だ。

「楽しみは、とっておくものですよ？」

ユオンが首を傾けると、サラツとした黒髪が流れる。

『魅了』の効果もあって、MEDYの顔がぼーっと染まっていく。

全員が、『魅了』された事を確かめたユオンは、次なる段階にはいった。

魔力を複雑に練り上げ、雷魔法と闇魔法の合成魔法……『暗示』を実行する。

「皆さんが、楽しみを求める気持ちは分かります」

目を細め、柔らかかに微笑むユオン。

なんて優しい気な表情なんだ！！

だが、『魅了』中である。

「でも、誰もが同じ気持ちを持っています。皆さんが、楽しみを求

める事で、誰かが大変な思いをする……それが顕著なら、公平じゃありません」

今度は、悲しげな表情で視線を落とすユオン。

そんな痛ましい彼をみたMEDY達が、あああつ！と、悲鳴をあげる。

「『着せ替え』も、楽しいかもしれませんが、人に迷惑をかけたらいけないです。

これからは、人に迷惑を掛けないように、目の保養してください」

再びニコツと笑うユオン。

なんて無邪気な微笑みなんだ！！

だが、『魅了』中である。

彼女達は、ぱーっとした表情でユオンの話を聞いていた。

「ね？　　お願いします」

とどめの上目遣い。

美少年の上目遣いは稀少価値が高く、破格の破壊力があつたようだ。

うんうんと大きく何度も頷くMEDY達。涙を流して感動している者もいる……。

「ありがとうございます」

満足気な笑顔のユオン。

『魅了』で術のかかりをよくした状態で、言葉の綾と己の容姿をうまく活用し、言いくるめ、最終的には、『暗示』で納得させる……。

将来が未恐ろしい。

アルスは、身震いした。

今ここに、伝説ができた。

数百年にわたり、ファールス家歴代当主達の頭を悩ませてきたMEDYが、たった六歳の美少年（ここ重要）によって、鎮静されたのだ！！

『暗示』の効果で、彼女達が『着せ替え』をはじめめる事は二度とないだろう。

信じられないものを見た……。

アルスは、体中の力が抜けていくような錯覚を覚えた。

「なあ、アルス」

カルストが、ユオンを見ながら話しかけてきた。
ユオンは、今、マルタにそれはもう、もの凄い勢いで撫でられている。

「なんだ？」

「ユオンは、GAZに向いてると思うんだ」

「奇遇だな、同感だ」

ちょうど同じ事を考えていたところだった。

「もう、仕事を与えても問題ないレベルだとも思うんだ」

「奇遇だな、それも同感だ。だが、今はそこまで切迫した仕事がない……いや、まて」

アルスはルディアに視線をむける。カルストも彼女を見た。

アルスがカルストに頷くと、カルストはニヤリと笑った。

「よし。ユオンの教育方針が決まった。それでいいな？」

「ああ、頼む」

まだ、マルタに撫でられ続けている彼に愛しい我が子^{ルディア}を任せる事にしよう。

結婚は、許さんがな。

カルスト父さん（前書き）

MEDYの一件が落ち着いた後、カルストは、書類を取りに自室にかえっていた。

そうだ。ついでにアレも……ん？ あれ！？

アレがない！？ どこいったんだ！？ さつき、確かにポケットの中に……そういえば、アルスにおもいきり蹴りをいれたっけか？ もしかしなくても、あの時に落としたか。

机に両手をつき、がっくりとうなだれる。自分のドジさにほとんど嫌気がさした。

マズイ。さつきと回収しないと、また面倒くさい事になるかもしれない！

カルストは、あわてて来た道を引き返した。

カルスト父さん

「はあ」

疲れた。

MEDY達が執務室を出て行ったあと、ユオンはソファに座り込み大きなため息をつく。

MEDY達に『暗示』をかけた事で、ユオンは多くの魔力を消費していた。

先に『魅了』で術をかけやすくしたが、聞いていた通り彼女達の魔力が強く、予想以上にこずってしまった。光属性のーー特にルイーゼは、諦めようかとも思ったほどだ。

さすがは、ルディアの母といったところか。

逆に、母さん（マルタ）は一番術のかかりが早かった。なんの障害もなく罪悪感を感じてしまうほどだ。

それだけ、心を許されていたのか？

そう思うと、彼女が悪いとはいえ胸が締め付けられた。

「ユオン！ 大丈夫？」

ルディアが心配そうに近寄ってくる。

「魔力の消費が激しいわ。私、魔力飴とってくるね」

そうやって彼女は執務室から出て行ってしまった。今、部屋にいるのは僕とレジェル、アルスだけになった。

「このために、僕らに近づくなんて言ったのか」

『暗示』の無詠唱。しかも、かける人々の魔力が高くなると、光属性であるルディア達は、正直邪魔なのだ。

「まあ。原因をつくったのは、僕だったみたいですし」

母さんに服を頼んだのは事実。まさか、こんな事になるとは思ってもみなかった。

面白い所だな、ファールラス家は。

「君のおかげで、MEDY問題は解決だよ！

ありがとう！

」！

アルスが笑顔でユオンの頭をワシヤワシヤと混ぜる。疲れから、反応するのも億劫でとりあえず、わずかに笑っておいた。

「ん？ なんだ？ アレ」

視界の隅に何かが落ちているのが見えた。立ち上がって、拾い上げる。

「なんだろう、これ？」

「ああ。それはね」

西の国にある科学が発展した街で流通している、音声を記録する『録音機』という機械だ、とアルスが説明してくれた。これに記録した音声は、何度も繰り返し聞き返すことができるらしい。

「あ、何かついてる」

紐の部分に、ペンのような物が引っかかっていた。

「それはカルストの万年筆だ。じゃあ、これは彼の？ 録音機なんて何のために持ち歩いているんだ？」

アルスは、カルストが録音機を持ち歩いていた事を不思議に思っているようだ。

「仕事で使うんじゃないんですか？」

「いや、カルストは録音機は使わない。魔力石に記録するのが、彼の手法だ」

二人の会話から、カルストが何の仕事をしているのか疑問に思ったが、それよりも録音機に興味があった。

四つあるボタンに、再生、停止、巻き戻し、早送りと書かれている。

ぴっ

「あ」

いじっていたら何かを押してしまったようで、緑色のランプが光り、音声が流れてきた。

『怒ったマルタもかわいいよ』

ブツッ

アルスが横から静かに停止ボタンを押した。

今のは……カルストの声だった。しかも、自分に陶酔してんじゃないかな？

……録音機って、何度も聞くためにあるんだよね？

「「「……「「「

沈黙が訪れた。

アルスが無言でそれをつまみ、レジエルに差し出す。

レジェルはあきらかに嫌そうな顔をして、こんな物渡ししてくるなど
いうように手をふる。そして、僕の方を指差す。

いらないよ……。

そんな感じに、録音機の押し付け会いをしていると、外からバタバ
タバと足音がした。

アルスがとっさに録音機を自分のポケットに入れる。

ガチャ

入って来たのは……カルストだった。

「カルスト。ど、どうしたんだ？」

アルスは普通に振舞おうと頑張っているようだが、視線がおよいで
いた。

「いや、ちよつと忘れ物をさ」

しかし、カルストはアルスの不審な行動に気づいていないようだ。
気づけないくらいキョロキョロと執務室の中を見回して何かを探し
ている。

もしかしなくても、あの録音機だろう……。

カルストは、一通り執務室を見て回った。が、お目当ての物は見つ
からなかったようだ。

それはそうだろう。だっておそらく彼が探しているものは、アルスのポケットの中だ。

「あの……さ、アルス。この辺で、録音機見なかったか？」

！！！！

いきなり核心をついてきた！

黙りこむ僕ら……。

「……見たんだな。聞いたんだな！

いいわけをさせてくれ！！！」

いいわけがあるのか！！

三人でおもいつきり引いた。

「いや、もう、わかってるよ。大丈夫だ、誰にも言わない。お前にもプライバシーの二つや二つあるからな」

アルスは大きく頷いた。視線をカルストに向ける事はない。

「違う！ちがうんだ！！

はっ！！！！」

カルストは、アルスの背後から冷たい視線を投げかける僕に気がついたようだ。目が合うと、サーッと青ざめていく。

「あの、大丈夫ですよ……。大丈夫です。えっと、上手く言えたセリフってなんか……。何回も聞きたくありませんよね」

そして、そつと視線をはずす。

「ユオン！？ 何を言ってるんだ！！ 違う！！ 違うぞ！

！ 俺は、そんな人間じゃない！！」

「それ以外の解釈なんてできないだろ」

アルスがカルストから僕を守るように立ちまはる。

「違う！！ ルイーゼに録られたんだ！！」

「わかった。わかったから。

レジェル。ユオンを連れて夕食でもとりに行きなさい。醜い大人の姿を見せるものではない」

「はい」

「はい！！？ 違うって！ 絶対、分かってないだろ！！

俺は無罪だ！！」

レジェルに連れられて執務室を出た。後ろから悲鳴に近い叫びが聞こえてきたが、気にせず食堂に向かう。

「ユオン。一応言っておくけど、僕はカルストを尊敬してるよ?」

「はい。分かってます。完璧な人間なんていませんよね」

慰められるように、ぽんつと肩を叩かれた。

「あれっ!?! ユオン!?! 大丈夫なの?」

途中で、魔力飴を持って引き返してきたルディアと会えた。すれ違
いになったらどうしようかと思っていたところだ。

今、執務室には行かせない方がいいだろう。

「何味がいい? なんでもあるよ。多分」

両手で持てるだけの魔力飴を掴んできたらしい。彼女の小さい手の
中には色とりどりの魔力飴があった。

「じゃあ、黒豆」

「く……黒豆?」

「好きなんだ」

「へえ。めずらしいね」

甘さ控えめ。かつ、無駄な味がない。世間では最も人気のない味などと言われているが、僕は好きだった。
黒豆味のそれを口に含み、再び歩き出す。

カルスト・バージェスとマルタ・バージェス。
父さんになる人と、母さんになる人。

今日一日で、二人ともの、なんとというか負の面を見つくした気がした。

閑話 レジエルとルディアの攻防

「……ルディア」

はあ。と大きなため息をするレジエル。

「なあに？ お兄様」

ルディアはニコニコしながら少し首をかしげる。

「そろそろ、そこからどいてくれないかい？」

「い・や」

輝く無邪気な笑顔。

これが、対レジエル、アルスの最大の武器である事をルディアは知っていた。

カルストが教えてくれた。

はあ。と再び大きなため息をするレジエル。

今日はレジエルが学園の？に帰る日。いつもの事だが、ルディアは彼の妨害にかかっていた。
今回はレジエルが学園の？に持っていく荷物の上にちょこんと座り、一向に動かない。

「はあ。シルフ、シルフィード。すまないが、ルディアをどけてくれ」

「ルディア嬢くらい自分でどかせるだろ？」

シルフィードが面倒くさそうな表情で姿を表す。

「無理だ。可愛すぎる」

とんだ兄バカである。

「バカだろ」

シルフィードがぼそりとつぶやき、慌てて口をふさぐ。案の定レジエルにおもいつきり睨まれた。

「こんな事に我らを遣うのは、世界中どこを探してもお前だけだぞ」
シルフが呆れながら姿を表す。

二人がすうつとルディアの側を駆けると、突風が巻き起こり彼女を取り込む。

コオオオオオ

「きゃっ！」

荷物から引き剥がされ、ルディアの体が宙に舞う。三メートルくらいの高さまでで放り上げられ天井をかすめた彼女は、そのまま真っ逆さまに落ちていく。

落ちてる!?

衝撃に備えて、キュツと目をつむる。ボスンツという音とともに鈍い衝撃がはしる……が……

…あれ? 痛くない?

そっと目を開けると、目の前三十センチの所に床がある。

浮いてる? これは……

体をひねって辺りを見ると、ユオンが不機嫌そうな顔でこちらを見ていた。

「……何事?」

「ユオン!」

落下しても痛みがなかったのは、ユオンが落下直前に風魔法でルディアを受け止めたからだだった。

ユオンがサツと手を横に振ると、風がルディアを優しく包み地面に立たせる。

「さすがは、騎士^{ナイト}だな」

シルフィードが、ぐるぐるとユオンの周りを旋回する。

「……眠」

そんなシルフィードなど視界に入っていない様子で、目をこすっているユオン。どうやら起きたばかりのようだ。服装も就寝用の服装だ。

「ユオンって、朝弱いよね」

「いや……朝弱いって……そう言う事じゃなくてな？　今何時だと思っ？」

ユオンは、欠伸をしながらルディアに尋ねる。

「さあ？」

「朝の四時、十分前だ。お日様も昇ってないし、使用人達ですら起きてないよな？」

「嘘っ！！」

ルディアは、近くの窓までいって、バツとカーテンを勢いよく開ける。

「暗い」

辺りは真っ暗でしんとしていた。ルディアは今になってはじめて自分がとても早い時間に起きている事に気付く。

兄様……そんなに私に会いたくなかったの？

かなりショックを受けた。

「とりあえず、僕は二度寝しよう。おやす」ああっ!!」

「今度は何？」

「お兄様がない!!」

「レジエルならさっきシルフ達連れてどっか行ったぞ？」

「ええっ!？」

その頃……ファールラス家から少し離れた場所の上空。

「また今回も捕まったなあ。ルディア嬢もよくやる!!」

ゲラゲラと笑い転げるシルフィードを横目にレジエルは、ため息を吐く。

今日何度目のため息だろうか。

そう思うと、再びため息が漏れた。

「まさか四時前に起きて来るとは思わなかったよ。ユオンが起きてきてくれて助かった」

もし、ルディアに捕まったら、また？に着くのが門限ギリギリにな

っってしまうところだった。罰則は、？の庭掃除一週間。
可愛い妹には悪いが罰則は受けたくない。

まあ、今回はユオンもいるし彼女も退屈はしないだろう。

「で、今から？に行って開いているのか？」

「多分、六時には寮監が起きてくるだろうから、それまで待つよ」

「じゃあ、行くか」

「あ、ゆっくりでかまわないよ」

「了解」

彼等はゆっくり学園の？の方向に進みはじめた。

しんぎ

「ぶううう。ひま〜！」

ファールラス邸の中庭にある芝生の上を、ルディアはゴロゴロとこるがっている。綺麗な厚手のワンピースが汚れる事など、まったく気にしていない様子だ。

「ルディア嬢。せっかく綺麗な服がボロボロだぞ？」

「草まみれだ」

上空からシルフとシルフィードが姿を現す。そちらに目を向けたルディアは、彼等の透き通った体越しに太陽を直に見てしまい、しばらく視界が点滅してしまった。

「いいの。そんな事よりも暇なのっ！！ 暇暇暇！！！」

「ああ。そういえばしばらく騎士^{ユオン}が留守なのか」

「ドルバ王国のバージェス本家に挨拶に行ったんだっけ？」

ユオンが、バージェス家の養子となって約十ヶ月が過ぎた。

ルディアとユオンは仲がよく、いつも二人で遊んでいた。

ユオンは、屋敷に図書室があると知ると、そこで本を読んでいる事が多くなった。それでもルディア退屈していると必ず遊び相手になつてくれる。

悪いな、と思いつつも彼の優しさが嬉しかった。

カルストとマルタは手紙でユオンの事を、バージエス本家に伝えていた。すると、本家から『養子の顔が見たい』と返信が届いたのだ。忙しいカルスト達はその申し出を丁寧に断り続けていた。しかし、何度も何度も本家から手紙が来るので、諦めて暇をもらい、バージエス家におもむく事にしたのだ。

はじめは、行きたい！！と駄々をこねたルディアであったが、ユオンに言いくるめられてドルバ王国のお土産で妥協した。

「うん。私も行きたかったなあ。お外……」

いつもそう！ 私ばかり！

レジェルはよく屋敷の外に行っていたりしたのに、ルディアは屋敷から一步も外に出してもらえた事が無いのだ。

理由を聞いても、父様も、母様も『危ないから』の一点張りですれ以上は教えてくれないし！

やろうと思えば、簡単に脱走する事もできる。しかし、ファールス邸の周りは森ばかりだし、どちらに街があるのかさえ分からない。無事に帰ってこれる自信もないので、未だに実行できずにいる。

「なんにしる、今、暇であるという事実をいかにして覆すかが最大の難点であってね？」

シルフー。シルフィードー。何か面白い事なあい？」

聞かれて、シルフとシルフィードは腕を組む。

「「ないな」」

「むうう〜！　じゃあ一緒にトランプやらない？」

「う〜ん……ゴメンな、ルディア嬢。今からちょっと用事があるんだ」

申し訳なさそうに、手を合わせて謝るシルフィード。
忙しい中、退屈そうなルディアの様子を見て声をかけてくれたのだろ。

「そっかあ」

ルディアは、別にいいよ、と笑って、ゴロンと仰向けに寝転がる。
良い天気で、雲がゆっくり流れていくのがはつきりと分かる。
シルフとシルフィードは、ルディアの頭を撫でて何処かに行ってしまった。

しばらくぼーっと空を眺めていると、視界の隅を何か白いものが駆ける。

「あー！」

バツと跳ね起きてそちらをみると、うさぎが中庭の隅にある茂みに向かって猛ダッシュしていた。

「うさぎー！」

ルディアは何の意味もなく、そのうさぎを追いかける。
時間をつぶせそうな事なら何でもよかった。

うさぎは、中庭の茂みを越え森の方へ走っていく。

「童話の話みたい。このまま不思議の国に行けるのかなあ」

うさぎを追いかけているが、母様に聞いたむかし話のような童話を思い出した。

うさぎを追いかけて不思議の国に迷いこんだ女の子の話だ。

あの後、主人公はどうなったんだっけ？

童話の最後が思い出せず、ルディアは走りながら考え込む。

「……ぬし。危ないぞ」

「え？ きゃっ！」

ゴッー！！

突然上空から声がかかったと思ったら、目の前に木があった。反応が遅れたルディアは顔面からそれに激突してしまった。

「いったあ」

かなり痛い。額をさすってみると、大きなたんこぶができていた。しかも、わずかに血が流れている。

「あゝあ。だから言ったろうに。走りながら考え込むものでない」
また、上からさっきの音がする。

額をさすりながらそちらを見たルディアは息をのむ。

美しく深い青色の髪に、同じ色の両目をした、ルディアと同じ年くらいの少年が、木の枝の上で片膝を立て、ルディアをみていたのだ。木漏れ日が少年の髪に反射していて、彼全体がキラキラと輝いているように見える。

あの色は……ラピスラズリの色。

いつか見たルイーゼの首飾りについていた美しい宝石を思い出した。ユオンもだいぶん綺麗な顔立ちをしているが、この少年も負けず劣らず美しい顔立ちをしていた。思わず見入ってしまう。

「ぬしは、僕に見惚れているのか？」

少年がいじわる気な笑みをうかべる。

凶星を突かれたルディアは、真っ赤になった。

「はっ！！　ごめん。あんまりにも綺麗だったから」

ルディアがそう言うと、少年は、驚いたように一瞬静止した。

「む。正直な奴。」

まあ、僕が美しいのは自然の摂理だ。許そう」

そう言う少年は、わずかに頬を染めたが、ルディアは気づいていない様子だ。

少年は木から飛び降りて、ルディアの方を向くと、優しい手つきで彼女の前髪を持ち上げる。

「いたっ！」

「む？ 怪我にあたってしまったか？ すまぬの。……少々我慢せい」

少年がルディアの額にてをかざすと、青い光が発生し、ルディアの視界を覆った。

何だろう。この光……この魔力知ってる気がする。

それは、どこか懐かしい感じがした。理由は分からないが、とても暖かな気持ちになれた。

「これでよかる。まだ痛むかの？」

額をさわってみると、さっきのたんこぶも怪我也治っていた。

「治ってる！ ありがとう」

「む。気にするな。ではの」

満足気に頷いた彼は、そう言って立ち上がり、去るごと振り向く。

しかし、一向に動かない。

「……何かの？」

「え？」

「腕」

「あ」

少年が動かなかった――動けなかったのは、ルディアが彼の腕をつかんでいたからだだった。

完全に無意識だった。そこまで暇なのか？と、自分でも驚いた。

「え……と、あの、あなたはここで何してるの？」

少年の上からな物言いに、自然と下手に出た言い方になる。

ルディアの言葉を聞いた少年が首を傾げる。

「どうしてぬしに僕の推敲なる目的を話さねばならぬ？」

「だ…だよね」

……推敲なる目的？

一瞬笑いそうになったがなんとかこらえた。

「ぬしと違って僕は忙しいのだ。失礼する」

「あっ」

少年は、それだけ言うとルディアの手からスルリと抜け出し、風魔法で上空に飛び去ってしまった。

ずいぶんと上からな物言いだった…どこかの国の王族かしら？

パーティーでは見たことのない人だったと思う。あんな独特な喋り方をする人ならばきっと忘れる事はないだろう。

いったい何者なんだろう。名前すら聞く事ができなかったな。

ただなんとなく、またいつかどこかで、再び出会うような、そんな予感がした。

ルディアは、しばらくじっと少年が飛び去った方を見つめていた。

ファールラス家全体を見下ろす上空。アルスは一人、風魔法でそこま
で上がっていた。

彼の腕の中には一匹のうさぎ。
地上から遙か離れたこの場所に連れてこられたうさぎは、縮こまっ
て震えている。

アルスは、うさぎを安心させるかのように撫でてやった。

強風がサラサラとしたアルスの長い銀髪を彼の後方に流す。

「どうでしたか？ルディアは」

唐突に、アルスが言う。

彼の正面には、いつの間にやら一人の少年がたっていた。先程、ル
ディアが出会ったあの少年だ。

「む。随分と素直に育ったな」

「ふふ。ええ」

アルスは娘を褒められて満更でもない様子だ。気持ち悪いくらい類
が緩んでいる。

「それも、あの日、貴方がルディアを助けてくれたおかげですよ。
感謝します。」

トラスト神」

アルスは、深く頭を下げる。

頭を上げた彼の右目は、紅く、虹彩が十字に裂けていた。

「む。気にするな。僕がしたくてやった事だ」

トラストは両手を突き上げて大きく伸びをすると、懐から何かを取り出す。

それは緑色に光り輝く石だった。

「さて。もう行くかの。

久々に、故郷の空気が吸えてよかった……」

トラストが、石に魔力を注ぐと緑色の小さな光の粒が現れ、彼の姿を覆っていく。

「また、暇ができたならココにこようかの……」

美しき僕の生まれた世界」

光が一瞬大きく瞬いたかと思うと、彼がいたはずの場所には、やは

りあの日と同じように、一陣の風が吹くだけだった。

もう一つの目的

ガタガタと揺れる馬車の中。ユオンは一人静かに本を読んでいた。目の前では父さんカルストが書類を広げて仕事をしているようだ。隣にはもくもくと編み物をしている母さんマルタ。

馬車の揺れの中で文字を読んだせいかな、頭が痛くなってきた。本を閉じ、窓の外に目を向ける。

今はファース家の周囲にある深い森を抜け、数時間街道を進んだところだ。ちらほらと農民達が住むレンガ造りの家が見えてきた。

ユオンはこの風景を見た事があった。この街道はファース家に行く途中、死んだ両親と共に歩いた道だったから。

ここまできたら、ドルバの王都は近いかな。

思った通り、前方に大きな街が見えてきた。その中心にあるのが王城。ドルバの王族が住んでいる城だ。今からあの王城に行くらしい。

バージエス家現当主カルロ・バージエスは、若くしてドルバ王国の大臣まで上り詰めた実力者だ。

大臣ともなると忙しく、なかなか休みがとれない。こちらも今の時期以外は暇が取れそうになく、王城で会おうという事になった。

外の景色がゆっくりと流れていく。窓の外では数人の子どもが遊んでいるようで、楽しそうな笑い声が聞こえてくる。

ルディアは何してるだろ。退屈してないかな。

気になるのは屋敷で留守番をしているルディア。彼女とは、この数ヶ月でかなり仲良くなったと思う。

彼女はユオンがドルバに住んでいたときの話をしきりに聞いたが、ドルバに住んでいたときの話といわれても、なにを話せばいいかわからず、市場でのちょっとした事件や行商人との会話など日常生活の事を話した。つまらない話だったが、彼女にとっては新鮮だったらしく、すごく楽しそうに聞いてくれた。

「ルディアお嬢様が気になりますか？」

「！」

びっくりした。

母さんが編み物をしながらいきなり話しかけてきた。

「あの調子だったから……心配で」

ファールラス家を出発するとき、ルディアはかなり駄々をこねた。

一緒に行く！　と言って、ユオンから離れなかったのだ。

そういえばレジェルが僚に行く時も一悶着あった。

大人達はルディアが同行するのは反対のようであるスとルイーゼがダメだ、と彼女に言い聞かせていた。

すると、ルディアは泣き出したのだ。

『どうして私はお外に行っちゃいけないの!? 今まで一度だって屋敷の外に出してくれた事がないじゃない!』

僕の腕に巻きついたルディアの腕に力が入る。

なるほど。だから外の話を知ったがっていたのか。

ボロボロと涙をながし、しゃくりをあげる彼女に、大人達も困って顔を見合わせる。

多分、なにか外に出せない理由があるんだろうと思う。父さんと母さんが難しい顔をしている。

なにより、娘異常溺愛症のアルスが真面目顔だ。

大人達の様子に不安を覚えた僕は、ルディアを諦めさせる事に決めた。

『ねえ、ルディア。今回は留守番してなよ』
『いや』

『アルス様達を困らせちゃダメだよ』
『いや』

『ほら。そういうところが子どもだっていうんだよ?』
『子どもじゃないもん』

『子どもじゃないなら、駄々こねるものじゃないよ』
『駄々こねてなんかないもん!』

『そっ？　じゃあ、行ってくるから』
『いや！』

『やっぱり子どもなの？』
『違うもん！』

『じゃあ、いい子に留守番して』　『いや！』

『すぐに帰って来』　『いや！』

『ルディア、ちゃんと聞き』　『いや！』

『ルデイ』　『いやあ！！』

今かな。

『じゃあ、行く？』

『いやああ！！……あっ！　『わあゝ。ルディア。分かってくれたんだ！　ありがとう！　いい子だね。いっぱいドルバのお土産持って帰ってくるよ』』

自分でも無理矢理すぎだったと思う。でも、素直な彼女なら効かない事はないだろう。

やはりルディアは再び泣き出してしまった。こうした方がいいんだろうとは思ってした事だが、彼女の涙をみると心が痛んだ。

『ふうう……つく……いや。ユオン、行かないでえ……』

ぎゅっつと抱きついてくるルディア。ドルバ王国へ挨拶に行くだ

けなのに、端からみたら今生の別れみたいになっていることだろう。ものすごく可愛いと思うが、そろそろ娘異常溺愛症患者の視線が非常に気になりはじめたのでそつと彼女の手をほどき、頭をなでる。

『すぐに帰ってくるから、ね?』

『もういい!』

彼女はそう叫んで僕の手を振り払うと、屋敷の中に入ってしまっ
た。

『悪い事したかな……』

『いや、ありがとう。今、彼女を外に出す訳にはいかないんだ』

アルスが複雑そうな顔をして屋敷の方に視線を向け、ルイーゼはルディアの様子を見に屋敷に戻っていく。

『カルスト。今のうちに立出しろ。ルディアに、なにか美味しい物でも買って帰ってくれ。』

あと、例の件も頼む』

『ああ。じゃあ行ってくる』

『いってきます』

……これが出発するときの話。そして、冒頭だ。

「ルディア様にはいろいろとありまして、一度もお屋敷から出られたことがないんですの。
ユオンが来てからルディア様も楽しそうで……本当によかったですわ」

長い間傍でルディアの世話をしていた母さんだからこそ、喜びが増すのだろう。ほんとうに嬉しそうに微笑んでいる。

「どうして彼女は外に出たらいけないんですか？」

おもいきって気になっていた事を聞いてみた。今までそれとなく尋ねようとはしたが、なんとなく言い出せずにいたのだ。

「それは……」

言うてはいけない事なのか、母さんは助けを求めるように父さんを見た。

一応父さんはファールラス家に仕えている者の中では一番偉い人らしい。バージエス家長男ともなれば当然か。

「ユオンもすぐにわかるさ。」

それよりも、ほら。目的地に着いたぞ。ここだろうか？

「あ……はい。そうです」

窓からみる景色は、いつのまにかよく見慣れたものになっていた。ゆっくりと馬車が止まり、目の前にあったのは、やはり見慣れた小さな家だった。

ユオン達がドルバに来た目的は、ただバージェス本家に挨拶をするだけではない。

ドルバにはユオンが今まで死んだ両親と共に住んでいた、もう誰も住むことのないであろう家がある。そこから必要なものを引取り、売るのも目的のひとつだ。

住んでいた当時は大きく感じられた家も、今となってはとても小さく見える。あんなに大きなファース邸に住んでいたら当然の感覚だろう。

少し寂しさを感じた。

実に約十ヶ月ぶりの、主の帰還だった。

ユアン・アレイドの家

鍵で玄関の扉をあける。今まで何回も繰り返してきた行動だが、なんだか変な感じがした。

中に入ると懐かしいハーブの香り。

久しぶりに、帰ったな。

ここで一緒に暮らしていた両親は、もうどこにもいない。

感傷に浸りながら部屋を見回す。棚に並べられた薬びんも、擦り切れた絨毯も、整理された本棚も家を出たときとなにも変わりなかった。

でも、なぜか懐かしい部屋との間に見えない幕があるようで……あの日々をよい思い出として見ている自分がいることに気づかされる。今の生活が僕に浸透してきているのか。

そう感じた。

片付けを始め、必要な物などを自分の空間にしまい込む。もくもくと作業をしていたユオンは、ふと何かがおかしい事に気づいた。

十ヶ月も空けていたにしては、綺麗すぎないか？

部屋の棚の上や、机も、まるで誰かが住んでいて丁寧に掃除されているかのように綺麗だったのだ。

ユオンは台所に向かった。

「！　これは……」

ユオンが目にしたのは、色とりどりの野菜がはいっている野菜カゴ。だが、ここを出る前この野菜カゴは確かに空にしたはずだった。

間違いない。誰かが勝手にこの家に住み着いてる。

何の許可もなく住まれるのは嫌だった。普通の間違った感覚だと思う。

「いったい誰が……」

気をとられていたユオンは、背後から近づいてくる人影に気づけなかった。

その頃、外ではカルストが商人と家の売約を済ませたところだった。

書類にサインをして、契約完了。商人は書類を受け取ると、そそくさと帰って行った。ドルバ王国で、カルスト・バージェ

スの名前は有名すぎたようだ。

「ユオンに、あの事を話すんですの？」

ずっと隣で黙っていたマルタが唐突に尋ねてきた。

「ああ。ユオンならちょうどいいだろう。嫌か？」

そう返すと真紅の瞳に影がさし、彼女は視線を落とす。

「複雑ですわ」

「そうか」

複雑……ね。正直、反対されるところだった。

まあ、最終的に決めるのはユオンだ。

ガシャーン

「！！！！？」

突然、家の中から大きな音がした。同時に、ユオンの魔力が大きくうねるのを感じる。

まさか、空き巣でも入っていたか！？

二人は家の中に駆け込んだ。

「ユオン！？　大丈夫つ……そうだな」

ユオンは、家の中の台所にいた。

ひっくり返って足が天井に向いている机の上に乗り、何かを掴んでいる。三つ編みに結われた人間の髪のような。

よく見ると机の下に人が一人下敷きになっいて、バタバタともがいている。

「ユオンに限って心配は不要でしたわね……」
「だな」

まったく、出来が良すぎて困る息子だ。

ホツとして、机の下でもがく男をもつとよく見ると……黄緑色の髪、オリーブ色の瞳……

ん？どこかで見ただことある……

「あれ！？ 風の精霊王！！？」

ユオンが来た日にファールラス家を訪れた風の精霊王がそこにいた。

彼は机の下で「痛い！ 痛いですよユオン！！」とわめいている。

対してユオンは無反応で、ピクリとも動かない。

揺れる机の上を、掴んだ風の精霊王の髪だけでバランスをとっているように見える。

しばらくして、ようやく微かに動いたユオンの唇からこぼれ出た言葉は……

「……地に還れ」

ユオン、ダークサイド入りましたー！！

全身からにじみ出る彼の闇の魔力は、ユラユラと揺らめき、おどろおどろしい雰囲気を作り出している。

不覚にも呆然としてしまったカルストが我に帰り、慌てて止めに入る。

「ユオン！ 何やってんだ！ 風の精霊王だぞ！？」

ユオンは、それを聞いてもやめようとはしない。

それどころか、『風の精霊王』と聞いた瞬間一段と彼の魔力が大きいくうねったような気がする。

「分かってます。

これに関しては、敬意なんて unnecessary です。存在価値なんてありません。

コレが存在するためのスペースがもったいないです。木でも植えた方が絶対世界の為になります。

コレが消滅した際にはシルフを新精霊王に推薦します。

だいたい、喜んでるじゃないですか。踏まれて」

無表情に、何も映していないような瞳、抑揚のない口調……それで精霊王をボロクソに言うユオン。

扱いづらい！ 扱いづらいぞ息子よ！！

「酷いですよユオン！　せつかくお兄さんが留守を任されていてあげたのに痛い痛い痛い！！！！」

「頼んだ覚えはない。」

「とうか、なんであの時一人帰ってんだよ？」

あと、ルディアに何もしてないよな？」

ユオンは、掴んでいる風の精霊王の髪をグイッとおもいつきり引く張る。情けなんて微塵も感じられない。

涙目になっている風の精霊王は、机の下でパチンと指を鳴らした。次の瞬間、机は床に倒れ、彼はユオンの背後にまわっていた。

そして、

「ユウオーン！　久しぶりですね！！」

おもいつきりユオンに抱きついた。あれだけこけにされていたのに、ものすごい笑顔だ。

「うざい！　キモイ！！　うせろ！！」

バキッ！　ドゴッ！　ボキッ！　という音がして、ユオンの放った三段技が風の精霊王に命中する。

ああっ、蹴りが甘いつ……じゃなくってだな！！　そんな事をしていいのか！？

改めて説明しよう。この世界で、もっとも偉いのが土炎水木風雷無を司る七人の精霊王達なのだー！！

風の精霊王はユオンの攻撃をくらってフラフラしながらも、はははと笑っている。

「心の広い精霊王様ですわね」

マルタが隣でそんな事を言って感心しているが……これは心が広い　なんてレベルではないと思う。

「チツ

しぶといな……」

ユオンからとうとう舌打ちがでたので、本格的に止める事にした。

後ろから、ユオンを抱き上げ、腕の上に座らせる。外見だけなら六歳児なユオンは、簡単にカルストの腕の中におさまった。

「うわっ！　父さんっ！　下ろしてー！！」

ユオンが暴れても体格差がありすぎてカルストはびくともしない。

懐かしいな。レジェル様もアルスに抱き上げられた時こんな反応してたっけか。

ジタバタと暴れるユオンを見て、ふとそんな事を思い出し、

笑みがこぼれた。

「ふあゝ！ ずるいです！ 私も！..!」

そういつてマルタが手を伸ばしてきた。

ようするに、愛しの妻が俺に向って手を伸ばしてきて、その間からづるづると可愛い瞳で俺を見上げてきたというワケだ！..!

つまりこれは！..!..!

「抱き上げて欲しいのかマルタ！..!??」

「いえ、ユオン抱っこしたいです」

ですよねゝ。分かってましたとも。

冷たく言い放たれた言葉は、カルストの心に深く突き刺さった。

腕の中でもがいているユオンをマルタに渡す。

「によー！ ユオンちっさいですわ！！ 可愛いですわあ！..!」

スリスリとユオンに頬ずりをするマルタ。微笑ましいような

.....羨ましいような.....。

「うう……抱っこされるような 年齢じゃない……」

嫌そうな顔をしたユオンは、まだ抜け出そうともがいている。しかし、マルタがそうはさせない。

かなり抵抗していたが、疲れたのか、諦めたのか急に静かになっってしまった。

「ははは。観念したか？ ユオン」

「よしよし！ じゃあ次は私の番ですねー！！」

風の精霊王が自然と割り込もうとしてくる。
あゝあ。せっかく収まるうとしていたのに。

「滅びろ！！！」

ユオンが再び暴れたしたので、おさめてきます。しばしお待ちを。

「で、なんでここにいるんですか？ 風の精霊王様？」

やや落ち着いたユオンは、風の精霊王から約五メートル離れたところでマルタに抱きしめられている。羨ましい。

「いえね、ユオンがこの家に帰ってきたとき誰もいなかったらかわいそうじゃないですか！

だから私が、ユオンが帰ってきたときに暖かく出迎えられるように留守を守っていたわけですよ！！」

熱弁であった。

「いらん。頼んでない。西の神殿に帰れむぐぐっ」

マルタがユオンの口をふさいだようだ。いちいち反応されたら話が進まないので助かった。

「まだ、話は終わっていませんよ？」

カルスト・バージェス。私達精霊王が、どうしてこの家の主達にユオンの魔力封印を頼んだと思いますか？」

「なるほど……そういう事」

「どついう事ですか？」

一人で納得してしまったカルストに、理由が分からないといった様子のマルタが尋ねる。

「ユオンの育ての親、ユアン・アレイドは、高名な魔術陣作家だったんだ。今までに、数々の魔法陣を作ってきた。精霊王達は、彼の腕を見込んで封印の陣制作を依頼した」

ユオンに関する事は『GAZ』を使って調べていた。もちろん報告書にはユアン・アレイドの事も書かれていたので知っていた。風の精霊王が静かに頷き、先を促す。

「魔方陣を作る過程では失敗作や、危険な物ができてしまう事がある。

おそらく、この家にはそういった陣が多数保管されているんだろう」

「なるほど。そういう事でしたのね」

パチパチと風の精霊王が軽く手を叩く。

「その通りです。

誰かの手に渡ってしまっただけではいけないので、私がユオンの出迎えのついでに見張ってたんです」

どこか得意げな風の精霊王。真面目なのか不真面目なのか分からない。

「ファールラス家の者に処理を任せましょうか。伝えて下さい。

『世に出では危険な物は処分を、制作途中でこれから何かに使えそうなものはどこかの機関に提供でもしてくれ』と。

これは、ユアンの遺言です」

「わかりました。アルスに伝えておきます」

「で、その失敗作の保管場所って？　僕は何も聞かされていないかっただけど」

本日はじめて、まともにユオンに話しかけられたのが嬉しいのか、風の精霊王はものすごい笑顔だ。

「その絨毯をめくってみてください」

絨毯をめくると、そこには魔方阵が床に焼き付けられていた。

「ユオン。その上に立って陣に魔力を注いでみなさい」

ユオンは、言われた通りに魔力を注いだ。すると、少し離れた場所の床に、異空間につながる小さな穴が開いた。中には数十枚の紙切れが入っている。

取り出してザーツと目を通していく。めんどくさい陣ばかりで、見ているだけで頭が痛くなりそうだ。カルストはその枚数だけ数えて自分の空間に放り投げる。

帰ったら読み解き作業をしないとな。

「あ、そうだユオン。荷物整理は終わったか？」

「あっ！　まだです。コレがいたので、すっかり時間をとられてしまいました」

コレ＝風の精霊王。

「いやですねえ、ユオン。いつもお兄ちゃんと呼んで下さいと言ってますのに……」

「じゃあ、僕片付け再開してきます。家具とかいらぬ物はおいといていいんですね？」

「ええ。何か手伝いましょうか？」

「ありがとうございます。じゃあ……」

ユオン……風の精霊王、無視されて泣いてるぞ？

その後荷物整理が終わるまでの間、ユオンが風の精霊王の相手をする事はいっさいなかったとか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9974y/>

第32世界

2011年12月30日01時50分発行